普通社會學

建部遯吾著

41
128k

普通社會學
第一卷

社會學序說

敍言

上　本著述作の由來を詳にす

一明治二十九年夏、吾帝國大學文科大學哲學科の業を卒へて將に大學院に入らむとし、專攻學科を定むるに社會學を以てせり。時に故指導教授外山博士の諭告に曰ふ、大學院の專攻學科は、同院學生在學期の間に於いて研究し了せらるゝを要する者、社會學を以て此に擬する、恐らくは科目の廣大に失するなきを得じ、社會學科中某事項を選定すること尤も適當と爲すべしと。吾敬みて對へて曰ふ、大學院專攻科目に關する高諭は敬みて命を聞けり、獨り生が今者の學程に於いて社會學を選定せる、抑、所以あり。生や幸に高等中學、及分科大學の正徑に由りて進むを得、餘力亦曾て東京專門學校の門戸を窺ひ、東京物理學校の堂庭に登るを經たり。有形無形、理論應用、諸學科の性質を會得するの端緒を發くに於いて、偏なく執なく、幸に周して比せざるを庶幾す、乃ち一たび文科大學に於いて哲學科を選び、萬般學問の向上的絶巓に攀ぢて、乃ち以て天下

を小とし、既往を約して來者を迎ふ、今や三歳の學程、頗る亦學問體系の尖頂に立ちてその全般を達觀するを得たるに似たり、乃ち向下的事功の第一着として來る者は、即ち生が究竟研學の對象たる社會に就いて、尤もその基礎的全般的研究に任するを順當なりとせざる可からず。思ふに社會の基礎的全般的研究は、社會學の事功に外ならず。社會學や、既に文科大學の學程に於いて二年間講筵に陪し、傍ら東西古今の先覺の述作について、聊か看る所ありしも、學科其者の猶未だ充分に發達せざる、體系の一定して整然たるなく、問題の確立して答解を促すなし。乃ち今や社會學の研究は、社會學其者の全般的基礎的研究より始むるを要す、是れ生が向下的事功の第一着として、哲學講習の後に社會學の全般的研究を寡ける所以、蓋し亦歐西及我國諸家の兎も角編述公表せる斯學の體貌、一として生の據りて以て斯學の部分的開展を成すに足ると爲す可き者なきに慨するなり。全般的研究に由りて斯學の成形一たび完きを得る、部分的研究は當然之に次ぎて成さるべき者、全般の成形を完うするを願ることなく、輕卒に急遽に細節末項の挪揄を事とし、專門家を以て倨然として自ら居る所謂科學的研究の陋、生が斷じて就くを屑とせざる所。乃ち若し社會學の研究にして大學院の專攻科目たるを得ざるあらば、是れ生の未熟なる、未だ大學院に入るに達せざるか、抑亦

斯學の幼稚なる、其部分研究を以て大學院學生を煩すの域に到らざるのみ。大學院に入るの研究上便宜にして順當なるは言を待たざるも、而もこれが爲に生が至當なる規模と信ずる所を枉げて、學程の一變更を試むるは、生の能くせざる所なり。乃ち生は社會學の全般的研究を專攻學科とする條件の行はるゝ以内に於いて大學院入學を志望する者、希くは明鑑を賜へと。博士以て可なりとし、乃ち大學院入學を許され、爾來幸なる進程を趁うて、以て所期の社會學研究に從事するを得たり。明治三十年十二月、外山博士の講座を去らるゝに際し、襲うてその講師に承け、三十一年七月乃ち海外駐在の命あり、眼を東洋古今の典籍に晒すの便宜、聊か奪はれたる者ありと雖も、獨佛諸國の新學界を觀察し、殊に歐西社會文明の眞相を觀察する、其便亦尠しとせず、荏苒既に四周星を過ぎ、稿を改むること二たび、改訂校正は其數を知らず、而して漸く成れる者、研究の成果、即ち本著普通社會學、凡へて四卷十二篇三十五章二百三十六節、社會學の全般的基礎的研究に於いて、固より未だ完しと謂ふを得ざれども、而も從來龐雜蕪穢なる諸家の述作に比して、一步を進めたる者といふの要求は、本著が敢て提供を憚らざる所なり。卽ち本著は社會學の系成に於いて、竝に其各部諸問題の、多くは新なる解明に於いて、全く一の新研究にして、固より生

奪活剝の譯述的著作と同じからざるは、本著の內容能く之を語る、必ずしも具眼の知者を待つといはざるなり。

一社會學は尤も有形無形の諸科學に資料を獲、尤も東西古今に亙りて其史的源流と事實的根據とを有せざる可からず。聊か此點に於ける苦辛は、本著が竊に以て知人に期する所の者なり。

一國語の獨立は學問の獨立及社會の獨立の一大要素なり、本著は一切の外國語を排斥して、悉く國語を以て充つる所あり、其古來既に存せる者は仍りて之を用ゐ、其未だ存せざりし者は、既に存せる者を成分として、忌憚なく新語を組成せり、新觀念が新名目を受くべきは固より當然なればなり、唯か、る新語の穩雅を缺くと、特に行文の頗る蕪雜なるとは、本著が敬みて大方の是正と優恕とを乞ふ所なり。

一本著の體貌、三部より成る、本文、註文、及冠註是なり、本文は大字を以て之を記し、悉く著者の胸臆より發せる者乃ち一毫も他學家の言說を引用せず、史的考察に屬する數節の外、本文中曾て一の「某氏曰はく」なきは、本著の特質の一徵とす、註文は中字を以てし、本文より二字下げて之を記す、多く本文の所說に對する諸家の說を次第敍述せる者、大抵本文取扱の問題の史的考察と見做さるべき者とす、卽ち本文と註文とを以て自家の考說と史的考察との間に截然たる界劃を設け、自家の研究と他人の考說との間に一の曖昧を容れざるは、本著の一大特質にして、歐西の學界、アドルフ・ワグネルの經濟原論の如き、乃ち儔侶たり、冠註は小字を以て之を記し、本文及註文に於ける學者、著書の目語句の註釋、典據照應等の細節を明にする者なり、西書に數、見る所の脚註と趣を一にす。

一敍述の體裁は、從來學者の述作を泛觀するに大概二樣ある者に似たり、一は綜合的敍述體にして、二は分析的敍述體なり、綜合的敍述體とは、大なる長き敍述をば、句切なく、章別なく、連續的にする者にして、大文字を作りて美文的結構を成すに恰當する者、分析的敍述體は之に反して、篇章節款を精細に區分し、秩然として序あるを期する者にして、奔蕩飄逸、波瀾跌宕の妙は之を期す可からざるも、事理を明析して精徹に入り、而も繁冗を去りて簡要に就くに於いては、尤も論理的敍述に適する者なり、今本著は此、分析體を取り、其長所を有し、併せて大に紙數を節約するを得たり。

一普通社會學の趣旨性質は、尙第一卷社會學序說に於いて之を詳にす。

一最後に一言を附記すべきは、本著が尙多少の不完全を自認するに拘らず、暫く玆に一たび稿を脫せる所以は、在歐の好機を以て、佛英及能ふべくんば其他の諸國に就いて

實地觀察の成す可き者多々、今より駐在期の終末に至るの日子は、乃ち全く此に捧げられざる可からずして、大學院滿期の曉にも、造詣は則ち此に止まる可きを豫想せるを以てなり、去秋曾て之を外山博士に聞く、論文提出は必ずしも五年滿期を待たずして可なりと、此稿改修の筆を起せる、今春三月六日に在り、正に博士の疾革まるに際せる者、東西參商、海天萬里、今や稿既に成りて人則ち亾し、悼ましいかな。

明治三十三年秋九月二十七日佛國巴里西郊清音河畔古宮趾

サンクルウ村舍に於いて　　建部遯吾識

下本著公刊の所以を明にす

一我國の學界、國語を以てせる專門學術書、いづれの學科に看るも其太だ匱少なるは、慨むべき事實なり。且是等の匱少なる學術書の大多數は譯述の類にて、剩餘の少數亦殆ど皆是れ體を具へて徹なる著述の類に過ぎざるは、更に我學界の大闕典と謂はざる可からず。社會學に關する述作、斯學の新生面の唯輓近十年間に開展を成せる、歐西に在りても今尙甚だ多きに苦むの域に至らず、況や我學界をや。殊に斯學の新なる進步に應じて、新なる系成を試むる者に至りては、吾が曩日本著を稿せるの當時殆ど之を賭ること罕なりしが、昨今僅にワアド、ギッディングス二三學者の之を試むる者あるに至れるのみ。乃ち今舊著を校訂して之を公にする、小には以て我學界に、大には以て世界の斯學界に薦めて、聊か斯學界研鑽者の一員たるの責務に違はざらむことを期するの徹旨に他ならず。

一本著の規模、その社會學體系との關係、卽ち本著の趣旨性質の要點は、第一卷第一篇第二章第五節に詳なり、就いて看るべし。

一本著を以て斯學の學習に充つるの讀者は、其初讀に於いては唯本文を通讀する、玆に可。本著を以て斯學の參考に充つるの讀者は、本文よりも寧ろ註文に重を置く、乃ち可。斯學の研究に從事して本著の評讀を試むるの讀者は、本文註文及冠註の三部を併觀して、著者用意の在る所を探る、始めて玆に可なりとすべし。

一本著全體を四卷に分つ、四卷各密接の關係あり、合して以て完體を成すは勿論なれど、各卷亦それ〳〵一小完體として看られ得ざるに非ず、之を歐西の學界に見る、這般各卷一部分の內容に該當する敍述を試み、題するに社會學を以てする者亦尠しとせず。題號と內容との不整合は言を須たされど、或る研究者は乃ち以て自個の參考に供して足れりとする者あらむ、本著の各卷を以て小完體に擬する、唯是等の研究者には則

ち以て妨なしとせむ。

一大抵卷の首節、卷の結構について敍する所あり。篇は卷中の大段を別つ所以、章は篇を別ち節は章を別つ、亦皆此に準ず。凡そ卷篇章節の分別は、論理的敍述の尤も苦辛を存する所、其長短大小の同じからざる固より已むべからず。間、節中更に大小數段の分別あり、以て一節の論理的敍述を成すも、而も節内更に款を立つるを爲さず、唯項目を分ちて、次第を附し、以て明劃紊れざるを期す。

一本文及註文の行傍、細字を以て番號を附し、以て冠註との照應に便ず。この番號は全章を以て始終す。

一學語の確定未だ完からざる、舊語尚且歐語の對照を要するが如き者乏しからず、況や新語をや。今唯その尤も重要にして疑はしき者に限り、冠註に於いて歐譯を掲げ、以て照應に資す。

一每卷尾、附するに歐文總覽を以てす、これ主として外邦の閲者に便せむが爲なり。其主として佛語に由れるは、曾て佛國社會學雜誌によりて之を世に公にせるが爲にして、其往々他の外國語を交ふるは、佛語に於いて更に適當なる譯語を得ざるが爲なり。

明治三十六年秋十月二十七日東京市谷僑居に於いて　建部遯吾識

總目

第一卷　社會學序說

第一篇　總論

第一章　社會
第二章　社會學
第三章　問題及體系
第四章　研究法

第二篇　史論

第一章　汎論

第二章　社會學の源流
第三章　社會學の成形
第四章　社會學の將來

第二卷　社會理學

第一篇　普遍原理
第一章　宇宙
第二章　人
第三章　理法
第二篇　普遍原則
第一章　存在

第二章　進化
第三篇　特殊原理
第一章　社會の要素
第二章　社會の規定
第三章　社會の動因
第四篇　特殊原則
第一章　社會の成立
第二章　社會の發達

第三卷　社會靜學

第一篇　社會發生論
第一章　自然社會の發生
第二章　人意社會の發生
第二篇　社會體制論
第一章　家族體制
第二章　國家體制
第三章　國際體制
第三篇　社會運營論
第一章　經濟
第二章　教化
第三章　政治
第四卷　社會動學
第一篇　社會進化論
第一章　社會進化の要義
第二章　社會進化の方式
第三章　社會進化の實質
第二篇　社會理想論
第一章　理想汎論
第二章　個人的理想
第三章　社會的理想

第三篇　文明論
第一章　文明汎論
第二章　社會進化の史觀
第三章　文明の概評
敍言
總目
歐文總覽
名目索引
諸家要覽

社會學序說目次

第一篇　總論

第一章　社會

第一節　發端　一
第二節　社會とは何ぞや　三
第三節　社會は事實なり　八
第四節　社會は一體なり　一一
第五節　社會は有機體なり　一四
第六節　社會は意識ある體なり　二二
第七節　社會は人格ある體なり　三三
第八節　宇宙萬有に於ける社會の地位　三八

第九節 社會の觀念 五一

第二章 社會學

第一節 學問 五五
第二節 學問の體統 六七
第三節 哲學及科學 七七
第四節 科學の體系 九〇
第五節 社會學の解義 九八

第三章 問題及體系

第一節 對象及問題 一一三
第二節 社會學の問題 一一五
第三節 問題及體系 一二二
第四節 社會學の體系 一二九
第五節 普通社會學 一四三

第四章 研究法

第一節 方法汎論 一四七
第二節 一般方法論 一五〇
第三節 特殊方法論 一五六
第四節 合理的方法 一六二
第五節 經驗的方法 一六四
第六節 事實の蒐集 一七四
第七節 觀念の運用 一八九

第二篇 史論

第一章 汎論

第一節 歷史的研究 一九七
第二節 社會學史料 二〇三

第三節　社會學の發生及發達　二一六

第二章　社會學の源流

第一節　日本に於ける社會學的考察　二二一
第二節　支那に於ける社會學的考察　二二四
第三節　儒學　二三一
第四節　印度思想と社會學的考察　二四四
第五節　希臘に於ける社會學的考察　二四九
第六節　中世に於ける社會學的考察　二六四
第七節　近世に於ける社會學的考察　二七〇

第三章　社會學の成形

第一節　社會學成形の因緣　二八一
第二節　社會主義の興起　二八七
第三節　自然科學の進步　上、エネルギイの理論　二九四
第四節　自然科學の進步　下、進化の理論　三〇一
第五節　哲學の進步　三一〇
第六節　史學の進步　三一八
第七節　經濟學の進步　三二一
第八節　政法の學の發達　三二七
第九節　オオギュスト、コムト　三三〇
第十節　コムト以後の社會學　三三七

第四章　社會學の將來

第一節　明治時代　三五一
第二節　現代人文の缺點　三六七
第三節　社會學の前途　三七一

社會學序說目次

歐文總覽

第一篇　總論

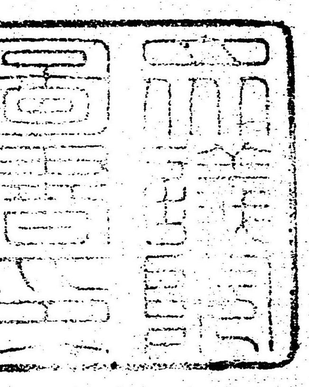
大學

大丈夫應究大塊所有之
學以立大塊所無之言

佐久間象山

第一章　社會

第一節　發端



學問の研究は先づ其基礎の確立を要す。學問の基礎たる事項は、學問の對象、性質、範圍、及方法、卽ち是なり。是等の事項にして明確ならざるか、學問は未だ確乎たる基礎の上に立つを得ず。我社會學が基礎的研究を重しとする所以、而してその序說を以て始まる所以、亦實に玆に存す。

學問の基礎を確立するに二法あり。第一は理論的方法にして、合理的推究によりて學問の基礎たる事項を繹ね

定むるもの、是なり。第二は歴史的方法にして、人文ありてより以來、斯學の範圍及關係事項に關する造詣及變遷を繹ね、其現今に於ける地位を決定し、以て將來の研究事項を結束するもの、是なり。

此二法よりして、學問の基礎的研究に四樣の方針は存立し得べし。

第一、完全研究。理論的方法及歴史的方法の二者を兼ね備ふるもの。

第二、理論的研究。單に理論的方法を備へて、歴史的方法を闕けるもの。

第三、歴史的研究。單に歴史的方法を備へて、理論的方法を闕けるもの。

第四、模習。理論的方法及歴史的方法の二者、全く之を闕きて、唯前人の造詣を模習するに止まるもの。

此四樣の研究方針について、完全研究は卽ち究竟に詣るを期し得る方針なり、如何なる學問も、亦何等の地位及程度に在る學問も、此研究を以てすれば、方法上の缺點を免れ得べし。理論的研究は、頗る究竟に詣るの觀あるも、歴史的方法を闕くがために、時に或は徒勞に陷るの弊を免れず。歴史的研究は、理論的研究の既に完備せる者を補うて基礎的研究を完からしむるの功あるも唯是のみを以てしては、疎漏の弊あるを免れず。模習に至りては、實は研究と名づくるの價値なきもの、卽ち全然學問の基礎的研究を成すに堪へざる者なりとす。

今我社會學は殊に完全なる基礎的研究を必要とする學問たり、其理由三あり。社會學の對象、卽ち研究の目的物は社會なるが、社會といふ觀念の甚だ複雜にして廣大なるがために、社會學の問題は實に多樣にして、從來學者の間に一致を闕けること、是れ理由の一なり。社會學を研究する方法の雜多なるや、其得失の明ならず、相互の關係の確ならざること、是れ理由の二なり。殊に尤も患ふべきは、是等種々の不確定事項あるより、遂に學問の性質にまで見解の相異を生じて、紛紛として學問の地位其者の不定を來せること、是れ理由の三なり。是故に今に於いて單に社會學といふも、往往其何種の社會學なるかを判ずるに苦むもの少しとせず、是れ斯學が殊に完全なる基礎的研

究を要する所以なり。

社會學序說を分ちて二篇と爲し、理論的方法を講ずるを總論と爲し、歷史的方法を講ずるを史論と爲す。

社會學に於ける序說の必要は、現時に於いて諸家殆ど皆之を認む。蓋し斯學は其本來の性質及其發達の歷史より、知識の總束及人生の全般に對する關係地位を遺忘せざらむことを旨とせり。乃ちコムトは其實理哲學體系の第一卷[一]を以て全く學問の總論に充て、スペンサル亦其第一原理[二]を以て之に充つ、現時の學者の中、ド・グレエフは其社會學入門[三]の前半を割いて全く序說に充てたるが如き、其尤なる者といふべく、フイエエ[四]、デュルケイム[五]、ヲルムス[六]等、皆多少重きを序說に置かざるはなく、獨に於けるジムメル[七]は今や頻りに之を講じ、墺のグムプロキッツ[八]、瑞西のスタイン[九]亦大に之を重んじ、米に在りてはギッディングス[一〇]極めて之に多頁を割愛す、獨に於ける耆宿リリエンフェルド[一一]及シェフレエ[一二]、米のワアド[一三]の如き、亦曾て頗る心を之に用ゐ、近時更に序說の根本

一　Auguste Comte : Cours de philosophie positive. — Discours sur l'esprit positif の諸書を參看すべし。

二　H. Spencer : First Principles 殊に Study of Sociology は全く序說の爲に作れる者といふべく、Social Statics の初章亦之を說くべし。

三　Guillaume de Greef : Introduction à la sociologie. 1886. 89.

四　Alfred Fouillée : La science sociale contemporaine. 1880. — Les Etudes récents de sociologie. 1896.

五　Émile Durkheim : Eléments de Sociologie. — Les règles de la methode sociologique.

六　René Worms :

的研究を再始せるあり、露のド・ロベルチイ、[一四]米のスチュッケンベルグ[一五]の如き、其所謂社會學書は唯序說のみより成る。今に至りて尙大に序說の尙ふべきを解せざる者は、蓋し科學的研究の名義の下に根本的研究の困難を逃避する者、たとへばスペンサル等の總括研究の全般に着目せるを解し得ずして、唯其社會學原理[一六]の一隅を見る者の類に過ぎず、バスコム、[一七]フェアバンクス[一八]等の小作者これなり。序說の重要は之を解するも、或は社會の心理的研究、或は文明の研究等、特殊題目の研究に專にして、未だ手を序說の攻究に着くるに及ばざる者は、佛のタルド、[一九]英のマッケンジイ、[二〇]獨のリンドネル[二一]等なりとす。乃ち今日に在りて、苟くも社會學の充全にして包括的なる研究を企つる者は、尤も其基礎的研究に重きを置くを知了すべし。序說を以て蛇足と爲す者は、未だ學問の深奧なる意義を解せざるの徒なるべし。

第二節　社會とは何ぞや

總論の敍述は、基礎的事項の各目に從ふを便とす。

社會學の對象は社會なり、玆に社會の攻究を成さむとするに當りて、社會の觀念を定めむが爲には、尤も手近なる觀念より起りて尤も深遠なる意義に到るを期するを可とす。是故に社會とは何ぞやといふ疑問に對する解義は、便宜上之を三段に約するを得べし。

第一、今や方に考究に進まむとする社會其者の指示。

第二、社會の觀念の要點を擧げて、粗其順當なる觀念を得るに到ること。

第三、內外充分なる意義包含に於いて、社會の觀念の明瞭精緻に達すること。

就中第一解義は常識に於ける社會の觀念にして、第二

Organisme et Société. — De natura et methodo Sociologiae.

七 Georg Simmel: Probleme der Geschichtsphilosophie, eine Erkenntnisstheoretische Studie. 1892. — The Problem of Sociology. (Annals of the American Academy of Political and Social Science, Vol. III. No. 3. 1895).

八 Ludwig Gumplowicz: Grundriss der Sociologie. 1885. — Sociologie und Politik. 1898.

九 Ludwig Stein: Soziale Frage im Lichte der Philosophie. 1891.

一〇 Franklin Giddings: Principles of Sociology. — Theory of Socialisation. — Inductive Sociology. 1901.

一一 Paul von Lilienfeld: Gedanken über die Socialwissenschaft der Zukunft. 1873. — Zur Vertheidigung der organischen Methode in der Sociologie. 1898.

一二 Albert Schäffle: Bau und Leben des socialen Körpers (1874 und 1896)

一三 Lester Ward: Dynamic Sociology. 1883. — : Outlines of Sociology. 1898. — : Province of Sociology (American Journal of Sociology) 1897—99.

一四 De Roberty, La, Sociologie. 1893.

一五 T. Stuckenberg: Introduction to the Study of Sociology. 1898.

一六 Principles of Sociology.

一七 John Bascom:

解義を繹ぬるが爲に必要なり、第二解義は學問の起點に於ける社會の觀念にして、第三解義を求むるが爲に必要なり、而して第三解義は卽ち社會の充分なる攷究を須ちて、換言すれば社會を對象とせる學問、社會學其者の研究を遂げ了りて、始めて茲に明なるべき者なりとす。[三]

常識に於ける社會の觀念は左の如し。

社會は二個以上の人の協同生活[三三]の體なり。[三四]

一個人は社會を成さず。二個以上の動物の群集について、或は動物社會[三五]をいふも、こは唯類比の爲に社會といふ語の移れるまでにして、嚴密にいふ社會は必ず人の集合體を意味す。二個以上の人も、空間時間に於いて全く相隔離し、若くは全く其生活を相共にせざるとき、卽ち相互の生活上に因果の關係なきときは、社會とは謂ひ難し。二個以上の人が相共に協同生活を營むときは、社會は既に一の體と謂ふを得べし。

社會の義解は、學者これを種々に解す、或は又全く常識の解するに任せて毫も學術上の解義を試みざる者あり。論理書[三六]は往々方法論を敍述して、學問の或は定義をもて始まり或は定義をもて終るべきをいふ、一個學問の對象の定義は決して簡單に下され得べき者にあらず、是れ吾が三段解義の說ある所以にして、世の社會學者の社會の解義に於いて往往這等三段の各種を混同するの嫌あるを發見する次第なり。

第三節　社會は事實なり

今進みて社會の第二解義を繹ねむには、社會の觀念を

[一八] Arthur Fairbanks: An Introduction to Sociology, 1896.

[一九] Gabriel Tarde: La Logique sociale. 等。

[一一〇] John Mackenzie: An Introduction to Social Philosophy. 1890.

[一一一] Gustav Adolph Lindner: Ideen zur Psychologie der Gesellschaft, als Grundlage der Sozialwissenschaft. 1871

[一一二] 凡そ觀念の義解に此種の方法を用ゐるは、これを三段解義と稱して、本著者の慣用なりとす。

[一一三] 第二卷第四篇第一章にこれを詳說す。

[一一四] Victor Considé. Base de Politique positive. 1874. 亦全くこれと同一定義を揭げていふ。La Société = La collection des individus qui vivent en société. これ全く常識の社會の義解なれども、若しこれに止まるに於いては、學問上毫も價値なし。

[一一五] Alfred Espinas: La société animale. の著ゝくあり。

[一一六] J. S. Mill: System of Logic. 尤もこれを詳論す。

以て、他の既に知られたる、若くは知り易き事物の觀念と比較して考察するを便とす、卽ち社會の觀念を構成する、較、單純なる觀念を取り出して、以て社會の觀念の要點を認知せむとするなり。されば以下事實、一體、有機體、等の語を用ゐるは、各其抽象的觀念の意義に於いてす。

社會を以て單に有機體に比較するは、所謂社會有機體說[二七]を取る學者に常に見る所なり。シェッフレエ、リリエンフェルド、ヲルムス等皆社會と有機體との異同を稽査して、以て社會の解義を得むと期す、スモオル及ギンセント[二八]の如き、亦頗る甚だしき者なり。有機體の社會との近似の極めて著しきあらば、斯かる研究の手段亦不可ならざるも、此類の具象的類比は往往過大類比の誤謬に陷り易きが故に、吾は寧ろ各個の抽象的觀念を取り來りて社會を說明するを正當なる學問的方法なりと思考す。

二七　Organic Theory of Society これなり。

二八　Small and Vincent: Introduction to the Study of Society.

社會は第一に事實なりと認むべし。事實とは知識の對象として何人も拒否するを得ず離れ去るを得ざる第一的事象の謂なり。今社會の事實なるを認むる次第は、二種の方面より入るを得べし。

第一に常識よりする認定なり。社會として指示する所の者の現實に存立するは、何人も疑を容れざる所にして、社會學は直に此現實に存立する一事實を取扱はむとする者なり。卽ち社會は學問の起點に於いて先づ認めらるべき知識の對象なり、卽ち社會は事實なり。

第二は哲理よりする認定なり。社會は二個以上の人より成るといふが、人といふ觀念は外延的に我といふ觀念を包含し、我といふ觀念は內包的に人といふ觀念を包含

す。我は實在なり、卽ち我は哲學上の事實なり、我を除却せむか、一切の知識は成立すべからず。哲學上の事實たるは、一切の知識の根本義、隨うて一切の學問の究竟事實たり。一切の學問は我の自覺より始まり、社會の考察は、我が我に於いて人を了知し、外世界に於いて亦人を了知し、以て二個以上の人の協同生活の體を認識するより始まる。我が斯く二個以上の人の協同生活の體を認識するは、我の自覺の必然後件にして、不自然の境界に在らぬ以上、社會の認識は我の自覺と共に必然なり。是故に社會は實在なり、知識の對象としては、社會は事實なりといふ。

第四節　社會は一體なり

第二に、社會は一體なり、渾一(二元)なる體なり。竝に渾一といふ觀念は、一の體としての存在を謂ふ者にして、其自存の關係より見れば、其が衆多の部分として全體の存在を組成するを意味し、其外に對する關係より見れば、存在及不存在に於いて獨立の原理ある者たること、換言すれば他に從屬して存滅する者に非ざることを意味す。此後者の見地を以てすれば、社會を目して亦單位なりと謂ふを妨げず。

凡そ事物は其觀察の方面を異にするに隨うて其性狀を異にす。其外形よりいへば、主觀と客觀との間に空間時間の關係を異にするに隨うて相異を生じ、其內性よりいへば、抽象の方式及部局を異にするに隨うて相異を生ず。

二九 Unity, Einheit といふと同義。

若し主觀にして常住不變ならむか、同一の對象に由りて生ずる知識に變異あるべきものにあらず。是故に事物は各自個に於いては渾一なるも、知識は往往然らざるが如き見えを呈す。學者の考察は、殊に抽象の已む可からざる者あるが故に、事物の渾一たるを遺忘するの弊亦隨うて之に伴ふ。[三〇]

社會は、其各部分の相關の親密なる、自存の關係上、全體の存在を以て始めて部分の存在を完うする者なり。又外に對する關係上、社會の存在又は不存在には獨立の原理ありて、他の事物の存在不存在と全く關係なき或る者の實に存する者あり。卽ち社會は兩般の意味に於いて一體と目せざるを得ず。

三〇　例へば、法律家は時として資格を以て人を誤認し、舊派經濟學者は富を以て人を沒却し、醫家は肉體を以て人と誤認する類、數ふれば世に多きことなり。

渾一を遺忘するの弊、其尤も大なる者四あり。

第一、事物に與ふるに獨立の研究を以てせざる事。渾一の觀念中、殊に單位を遺忘するに於いて尤も屢見る所にして、一體としての社會を認めず、隨うて社會の存滅、社會の盛衰、社會の意識若くは行爲等は、學問上研究の對象と爲らずとするは、此誤謬に本づく者なり。歷史あるも社會學なしといふ謬見は、一は此に因す。

第二、各部局について、互に相撞着し相衝突して矛盾兩立せざる事實有りとする事。凡そ兩者ありて、觀察の樣式卽ち主觀に於ける相異を沒却して、各自其主張を持するときは、全く矛盾兩立し難き事實の現に兩立するを見るの逆說に陷りて自ら脫離する能はざるに至る。[三一]社會の

三一　盧山を以て或は峯と爲し或は嶺と爲すが如く、日を喩へて或は以て燭と爲し或は盤と爲すの類、皆これなり。

研究に於ける科學宗教矛盾の說、美術道德背馳の說、個人國家相殺の說の如きは、其適例なり。

第三、部分を以て全體と誤認する事。初より主觀の觀察樣式の特殊なるを遺忘するときは、其一偏の造詣を以て客觀の對象の全體に關する知識なりと誤認し、乃ち其知識は淺陋に止まり、知識の應用は實地と相協はざるを致す。學理を以て實際に襯合せずと爲して自ら煩悶する學者、若くは同一の事態のために學理を藐視せむとする實際家は、多く此弊に坐する者なり。社會の考察に在りては、從來個人の研究に基礎を限れる心理及倫理を根本として、教育、政治、國際上の論議に忙しかりしが如き、正に此弊套の悲むべき實例を與ふる者とす。

第四、全體を以て不可知と速斷する事。部分的考察にのみ慣るるよりして、全體に關する考察、及その結果たる全般的知識を以て、到底不可能と爲すは、渾一を遺忘するの第四弊なり。知識は畢竟主觀の樣式に應じて成し得る者にして、樣式の相異が卽ち知識の相異の原因たるが故に、部分的考察は部分的知識を致し、全般的考察は全般的知識を致す。此事理を沒却して、全般的考察を試むることを爲さず、乃ち直に全般的知識の不可能を速斷するは、卽ち此弊に坐する者なり。社會の考察に於ける知識不可能論は、多く此誤謬より來り、或は常識に據り、部分的知識に賴りて社會を處理せむとす、法律、經濟、倫理、教育の各一面に偏する社會論、想像的社會改良論[三]等は、皆此適例なり。

三　ユウトピアの如き多くの Socialromane は其例と指すべし。

從來社會の考察は、有力なる鴻學を除くの外、多く此弊の一若くは數個に陷らぬはなし、斯學の困難に由ると雖も、抑〻亦學者の思はざるに坐し、以て斯學の進歩の遲々たるを致せるなり。

上二節の所論、殆ど自明の理に屬するに似たれど、幾何學の劈頭に公理公法を掲ぐるが如く、自明に似たる根本原理を沒却するの弊は、或は精妙なる枝葉を缺くに軼ぐる者あり。スペンサルは事實をいはず亦渾一をいはざれど、社會を目してエンチティイと爲せるは、粗〻吾が說に合す、唯說いて未だ大に詳ならざるを憾むのみ、コムト及其徒、少くとも自らはコムトを祖述すと信ずるの徒[三三]は、多く宇宙の渾一、物の統一と謂ふを可とせむも、斯く渾一に着目するの創始者少くとも中興者として、コムトの偉功は竟に沒す可からず。社會の考察に從事する末流の小輩、或は却りて此大本の義理を忘れ、科學的研究の常套に

Littré, Carey, Fiske の如き皆然り。

米國社會學雜誌を見るに、時として遺憾なる不祥の光を見ることなきにあらず。此類に二樣あり。一は社會の實地問題に急にして全般研究の困難なるを顧みず、全般研究の困難なるを顧みず、乾燥無味なるを得堪へずして、實地問題の蟲に驅られて、實地問題の已に有する既に少なる知識等の些少なるに、統計等の實地的資料を加へて、一流なり。其二は尤も基督教社會主義なり。又は基督教社會學と稱して、一派に見る所にふ、一體的研究は、コムトが曾て其實例を示せるが如く、その獨斷的宗旨の保持に汲〻として、爲に成るべく社會學より其根本的權威を奪ひ、おのれ代りに新鮮なる勢力あるの隣家を割除し、以て之に據り、新に生氣あり勢力あるの隣家を割除し、以て之に據り、新に生氣あり、此盛名ある學問の下に、舊來の美衣の襤褸を蔽はむとするが如し。これ尤も斯學の發達を阻遏する者なり。學者の最も愼まざるべからざる者にして、學者の第一番に要する者は沈湎して、遂に斯學の據りて立つ所の大本を遺忘するあらば、是れ實にコムトの罪人、又斯學の罪人なるべし。[三四]

第五節　社會は有機體なり

既に社會の渾一なる體たるを知る、然らば則ち渾一なる體の何種に屬するかを定めざる可からず。

凡そ渾一なる體を大別して、單體複體の二類とす。就中社會が複體に屬するは、二個以上の人より成るといひ、而して、人や實に亦各渾一なる體として認めらるゝ者なるにて明白なり、卽ち社會は人を以て成分とする複體なり。

第一、集合體。空間時間の外、成分の間に何等の深き關

なりとす。

係なく、其體亦新なる性質を生ぜざるを集合體と爲す。

第二、化合體。成分全く體中に沒入して其迹を止めず、全く新なる體を成す者を化合體と爲す。

第三、機制體。成分の關係上より、體の內外共に動作を生ぜる者を機制體と爲す。

第四、有機體。成分は體の體制を成し、體は自ら、卽ち內部より、成長する者を有機體と爲す。[三五]

右四種の複體に在りて、社會は就中有機體なり。抑、社會は發達の程度に種々の差等あれども、其全類に通じて左の性質あるを見る。

第一、體制。[三六] 社會の成分たる二個以上の人は、相互に相互を助けて以て協同生活を營む、これが爲には、一人にして全體若くは二人以上の生存の要件を成就するを要す、卽ち所謂協力を成すの要あり。協力に單純協力及複雜協力の二樣あり、二個以上の人協力して二個以上の事を成すは乙なり。複雜協力は卽ち分業なり。社會は必ず協力の場たらざる可からず。此協力の場について、事業によりて各團各種の協力を分類するときは、社會は必ず各團各個の事に從ふ二個以上の團の聚合體たるの觀を呈するなり。是等の團は卽ち社會の機關にして、其團の數の增し、事業の體系の複雜となるは、社會の發達に隨ふ、初等なる社會も、初等なる機關の存せざるなし。斯かる機關の體系は、生物學にも、社會學にも、同じく名つけて體制と謂ふ所の者なり。[三七]

三五 Mackenzie は凡そ個體を五種に類別せり、卽ち (1) Monadism 單子體、結晶の類 (2) Monism 集合體、石壘の類 (3) Mechanism 機制體、天體の類 (4) Chemism 化合體、化合物の類 (5) Organism 有機體、植物の類 而して有機體を定義していふ "A whole whose parts are intrinsically related to it, which develops from within, and has reference to an end that is involved in its own nature." (Introd. to Soc. Phil., p. 146) 氏の如く有機體を適當に義解せるものなし。然も個體の觀察に於いて、機制體に先たしむるは不穩ならずや、體の內外共に動作を生ずるの點より、吾は右二類の次第を轉換す。

三六 Durkheim: Division du travail social. 1893. 此理を說くこと詳にして、以て社會各種の事業の綱目及其關係に及ぶ。氏は凡そ固結的 (solidarité) を機的、契約的を有機的と分ち、社會には規律の必要の三類に分ち、全然の規約的固結の成立には、分業を基とせる有機的固結を必要を論ぜり。スペンサルの社會學原理、亦主として體制の見地を持すれども、氏がやゝ契約的に傾けるは、ダルケイム氏の取らざる所たり。ドアレエフの社會現象の分類、亦體制の觀念を基礎と爲す。

第二、成長。社會は成長す。社會の成長には、自個に於いて之を制限する、之に一定の極限を置くの原因なし。社會の成長の停止は、社會の外圍に於いて成長を許さゞる事情の存するときに於いてす。但し茲に所謂外圍も、實は社會構成の要素なるは、後卷に之を明にすべし。[三八]成長といふ語は、生物學にも、社會學にも、斯く大體に於いて同義なり。

上の二項の性質に附隨して、更に二項の性質あり。

第三、代謝機能。新陳代謝の機能は社會の自然に具備する所即ち其成分の陳きは謝し新き者之に代るの機能なり。社會の代謝機能に自然的と同化的との二法あり、人の自然的生死によるる者は自然的代謝にして、體外より同化し若くは體外に排泄するに由る者は同化的代謝なり。

三七　分業の論は、經濟學及哲學、殊うて社會學の史上、忘るべからざるアダムスミスが、經濟的現象につき、詳密に論ぜるに起り、近時社會と生物との類比に於いて、機關及體制の觀念に關定するに及びて、益完全に赴きたるものなり。分業を更に協力の概念の下に將來して協力を即純及複雜の二類に分つはジョンスチュアート、ミルに於いて大に詳細を致せり。社會體制の論は、經濟的より社會的に進めりといふべし。(Adam Smith: Wealth of Nations. J. S. Mill: Political Economy.)

三八　本文、自個に於いて制限の原因なしといふは、人口の增大に極限なきをいひ、外圍に於ける制限とは、地味氣候等に於ける制限を意味す。

生物に於ける代謝機能は主として同化的なるが、大體に於いて此機能は生物及社會兩種の學に在りて其意義を變することなし。

第四、生殖。代謝機能の總計に於いて、新の代る量が陳の謝する量より大なるときは、成長あり、成長力といふは即ち此過剩を意味す。成長の極限に達して尙成長力あるときは、其結果生殖となる。社會の生殖とは、一社會より第二以下の社會の分出することの謂なり。分出の方法は、高等生物に於けるが如き有性生殖に似たる者あるに非ずして、一個より二個以上を分出する、所謂無性生殖に似たる者なり。されど又極めて初等なる生物の無性生殖に見る所の簡單なる細胞分裂に於けるが如く、分裂の後に於

いて親子本末の辨別なきは、甚だ多からず。

凡そ此等四項の性質は、一切の社會の皆具有する所にして、而も是れ恰も一切の有機體の具有する特質の全般、卽ち有機體の觀念に該當す。是故に、社會は有機體なりと謂ふ。

社會は有機體なり、社會には體制あり、といふは、毫も其體制の單純若くは複雜の斷案を含まず、實地社會の體制は或は單純、或は複雜、社會によりて種々の差等あるは勿論なり。唯體制を具有する體といふ以上、何等擧げて言ふべき性質を有せざるや否やの詮議は、猶大に殘留す、これ後節の事業なり。

社會は有機體なりと謂ふ命題は、所謂社會有機體說を尤も抽象的に顯現する綱領なり、近世社會學の發達は、此說によりて一大時期を劃す。今少しく此說の由來を看むとす。

日本及支那の哲學思想に在りて、社會と人との類比は極めて普通の事たり。蓋し凡神的思想は此思潮に通じて固有なりしより、宇宙と人との類比は直に出で來り、次いで又國家社會と人との類比に及べるなり。聖人の國家社會及宇宙に於けるは、人の心なる虛性靈覺の人に於けるが如し、といふ觀念は、殆ど孰れの學派にも普通にして、以て國家論の根基を成せり。[三九]

印度思潮は、直接に社會を取扱ふことに極めて短なりしも、其諸派の哲學思想に在りて、想像的類比は之を探るに難からず。其上代に在りて摩㝹の法典既に此思想を寓するに似たり。[四〇]

歐西に在りて、通例此說の淵源として目せらるゝは、プラトオンの共和國篇なり。[四一]氏は國家の機關を以て人の官能に比較し、國家に於ける議員商估等は、人心に於ける理性願欲等の作用に類すとなす。近世に至りて、ホッブスのレギアサンは、一歩を進めて、人と國家との間に、機關と

三九　尙書は尤もよく此思想を表する諸篇に富む。周易に至りては、殆ど天理と人道との、契合より一歩を進めて、同一の取扱を爲すの趣あり。後世朱子王陽明等の所論、實驗科學上の根據は遂に企及せざる所なりしも、その類比の詳密は尤も見るべし。我德川時代の諸儒、支那思潮の影響の大なる者は更にも言はず、上代の遺乘に徵するも、朧氣ながら道般の傾向を窺ふべし。

四〇　歐西にてこれに著眼せるは西班牙の學者 Santamaria de Paredes: El Concepto de Organismo social. Madrid. 1896.

四一　Plato: The Republic (Dialogues.)

四二　Hobbes: Leviathan.

レギアサンは、コムモンエルス或はステエト、羅甸語にてはシギタスといふべき者にして、技術によりて作成せられ、即ち人造の人間といふべき者なり。其主權は精神なり、行政官は關節なり、賞罰は神經作用なり。プラトオンよりホップスに至る、ストア學派の諸氏、エピクルス等あれども、此問題の研究上、格別發達の認むべき者なきを以て之を略す。

四三 Principles of Sociology, vol. I. Part II. Chap. II に社會と有機體との相似を論して、
(一)成長連續的、
(二)體量の增大と共に機關複雜の增進、
(三)機能の增進、
(四)各機關の增大及機能の增進の相互に組織的に相關係する事、
(五)個々の細胞の聚合を有機體と呼ぶが如く、個々の人の聚合なる社會をも有機體と呼ぶも不可なかるべき事、
(六)個々即ち細胞若くは人の生命とは無關係に、有機體即ち生物若くは社會の生命は延縮する事、
を擧げ、次に其相異點を擧げていふ、
(一)生物にては各部は複合するも、社會にては各隔離すること、
(二)社會にては交通機關あり、此隔離の弊を拒ぐ、而して完全なる一の生活體たるを得、
(三)生物にては感覺及思想の特別機關あれども、社會にはこれなく、全體殆ど皆一樣に之を爲すが故に、社會に於ける平權主義は社會生活の目的の上に起らざるを得ず。

四四 Intr. à la Soc. vol. I. p. 120. 有機體 (Corps Organisés. 實は具機體と譯すべし、後節參看) と超有機體 (Superorganisme) な

機關官能と官能との比較を爲す。[四二]凡そ斯かる觀念は皆大體に於いて國家の觀念を了得するを助くる者にして、社會を以て一體と爲すの知識は既に達せられたりといふべし。されど是等は皆寧ろ詩的想像の結果といふべくして科學的考察の結果に非ず。且以上の類比は、猶國家を以て直に生物の一類たる人類に比較せるに止まりて、未だ有機體の全般との類比、即ち觀念の對比に至らざること遠し。

近時に至り、オオギュスト・コムト出づるに及びて、社會學は始めて充全なる學問的態度を取るに至れるが、氏は有機體と社會との比較を甚だ重要視せず、唯社會を以て動物と對比せることありしのみ。其後スペンサルに至りて、大に此對比的考察を進め、先づ組織上の類比と目的上の類比との間に嚴密なる區別を立て、政治體と生物體との間には唯組織上の類比あるのみ、毫も目的上の類比なしと斷ぜり。[四三]氏がコムトに反對して國家の人造的なりや否やを疑へるは、國家及社會と之が成分たる人との關係の攻究の發端として價値あり、直に一般生物と社會との比較を成せるは、亦氏の功とすべきも、氏は社會と生物との類比を爲すに於いて、主として其相似點に着目せるが故に、其功過共に此に存して、社會の組織の理解には頗る適切なれども、社會の目的及理想の見解には太だ適切なる能はず是れ氏が弊の一なり。社會と生物との相異點に於いて尤も社會の特性の見る可き者あるに、氏の論法は之を探るに適せず、是れ氏が弊の二なり。社會と生物との對比に進みながら、乃ち復前來諸家の陳套を襲うて、具體的なる生物との比較に急にして、抽象的に有機體の概念と比較するを爲さず、乃ち學術上社會の觀念の作成に必要なる過程より遠ざかる是れ氏が弊の三なりとす。

更に現時の諸家について之を見るに、スペンサルが有機體以上の性質を社會に認めて下せる超有機體の名稱及考察に本づき、更に數歩を前進せる者をド・グレエフと爲す、氏に至りて、有機體との對比に拘泥するの陋は漸く明瞭となれり。[四四]フイエエは、其現時の社會學に[四五]ては、社會有機體說に對する非難をば、性質の差、起源の差、及終局の差の三點に約して反駁し、猶有機體說に固着せむとするの傾向ありしが、

る社會との差點十二を擧げていふ、(一)有機體にては、部分は全體より離れて存立し難し、超有機體は之に反す。(二)有機體にては、部分の損傷は或は一時、或は永久、全體の存立を危うす、超有機體は然らず。(三)超有機體は有機體に比して甚だ著大なる繼續存在を有す。(四)社會現象は甚だ長く又急に變化の繼續を現す。(五)凡そ官能の不等質は造構の不等質に伴ふ者なるが、社會に在りては殊に極めて著しく此分化を見る。(六)分化は社會の官能及機關の獨立により、より調和せらる。(七)有機體は有性及無性生殖により、社會は此增加す、他種々の方法によ(此點にて、氏は社會の內部の增加、大と社會の增加、即ち成長と生殖とを混同す。)(八)有機體の成長は甚だ狹く且有限なれども、社會は然らず。(九)有機體は、複雜となるに隨ひ、其活力は自存の爲に吸收せられ、生殖力は小となれども、社會は正に之に反し、複雜と增大とを加ふるに隨ひ、分身の能力を增す。(十)各機關及官能の關係は、社會は有機體の如く整齊同時的ならずして、相協應を隔て、時的す。(十一)社會は唯人より成立するのみならず、亦無機界を要素とす。(十二)有機體の單位たる細胞は、其物甚だ單純なれども、超有機體の單位たる人は智能を具ふる複雜なる者なり。スペンサルは是等の點を其有機體說に補ひむが爲に、超有機的進化の一章を加へたり。Pr. of Soc. Part. I. Chap. I.

近著社會學、近時の研究にては頗る緩和の態度を取るに至り、ヲルムスは有機體及社會の第一篇一般理論に於いて有機體と社會との異同を詳論し、未だ陳套の擺脫に至らず、ドモオル、マッサアル、ワンデルエルドの徒は、唯兩者の異同を認めむと力むるに過ぎず。輓近ノギコフの見地獨り大に衆を拔きて有機體と社會との類比を吟味し、社會學派を有機說及人種說の二派に分ちて、自らは甲に屬すと爲し、乃ち所謂有機體に於いて高等有機體、人的元素をも含める比較に進めり、氏に於いて名は有機體との類比といふも、實は既に人との比較の地位に達せる者、而も希臘以來の陳弊に坐して詩的想像の舊套を着けざる者なり。更に獨逸の大家に就いて見れば、シェッフレエはいふ、此類比は決して同一を意味せず、兩者の間の根本的區別は、一は有機的生物的にして、他は理想的工藝的なり、有機的一體と社會的一體と、生活の態度に大差あること斯の如く、又其造構に於いては、一は細胞の聚成にして他は個人の聚合なり、卽ち社會が特有なる事象を具ふるは、尤も牢記を要する事項なりと、然るに他の大家リリエンフェルドは、現時に於ける有機體說の極端なる曉將として、老いて益〻壯なり、氏は社會は具象的有機體なりといふを大旨とす。ヲルムスの體系は、生ける有機體と人間社會とを合同するに於いて成立すと、蓋し知言ならむ。佛のボルヂエは更に社會を以て生物となし、社會學を以て全然生物學の一分枝とするに至れるも、而も全然社會の經營に於ける人爲的要素を閑却する能はず。英國にてはマッケンジイ近時穩當なる說を出たし、米のギッティングス、獨のラッツェンホオフェル、瑞西のスタイン、墺のメングル等皆拘泥の弊を脫して正當なる見解に近づかむとしつゝあり。

之を要するに社會有機體說は、其始各國古代學者の詩的若くは常識的想像に發し、近時自然科學發達の機運に乘じて大なる促進を社會學に與へしが、今は漸く組織的成熟の域に進みて、學說の調和を企圖するに進める者なり、曾て具象的類比の弊ありしや、社會は有機體なりといふ命題より、一切の生物學の原理生物界の理法を取りて、直に之を社會の理法に充てむと擬し、遂に社會學をして一個生物學の

類比を以て形成すべき適用的學科たるが如き觀あらしむるもあり（五八ページ）。

超有機體の見解は、有機體說に於ける禍機、而して斯學に於ける進歩の萌芽なりき。されど一切の改革的動機に於けるが如く、其見解や實に懷疑的消極的なり、之を積極的に解明するは實に後の學者を竢てらしもの、而して心理的研究の學派は實に此任に當れるなり。

第六節　社會は意識ある體なり

有機體の觀念は、之を概言すれば體制を具へて運營行動するの體なりと謂ふに過ぎず、未だ必ずしも其運營行動の基底に於いて心的現象究竟の要素たる、所謂意識の有無を問はざるなり。今社會について擧ぐべき第四の要

點を繹ねて、社會は意識ある體なることを立するを要す。

社會は人を以て其成分と爲す。社會の體制を具ふるや、人性の全般を以てす。人の協同生活を營むや、何等かの方法を以て衆人意識の協合統一なかるべからず、此協合統一せる社會衆人の意識は、卽ち社會の意識なり。

衆人の意識の統一して社會の意識を成す所以如何を詮議するは、近時社會學上心理的研究の第一要目となりて、吾亦後卷に於いて詳論すべく、今は唯其可能を立證するに止むべし。此可能の爲に二種の方法あり、社會衆人の中に就いて、一人若くは數人の意識が、全社會に於ける衆人の意識を統一すること、其一なり、全社會衆人の意識が一定の體制の下に統一を成すこと、其二なり。這等の二法、

四五 Fouillée: Sc. Soc. cont. 1880.
四六 Lee Etudes récents de Sociologe. 1895.
四七 Demoor, Massart, Vandervelde: L'évolution régressive en biologie et en sociologie. Paris. 1897.
四八 Jacques Novicow: Conscience et volonté sociales. Paris 1897. p. 21—81.
四九 Bau u. Leben. d. soc. Körp. I. Auf. Bd I. p. 54—67.
五〇 La Pathologie sociale. Paris. 1891. —Zur Vertheidgung der org. Methode in der Sociologie. Berlin. 1898.
五一 有社會病理學論 p.4.
五二 A. Bordier: La vie de Société. 1887.
五三 同書 p. 289.
五四 Intr. to Soc. Phil. Glasgow. 1890.
五五 Gustav Ratzenhofer: Sociologische Erkenntnis. Leipzig. 1898. 社會學の自然科學的基礎といふ題目の下に統整して論述す。
五六 Soc. Fr. im L. d. Phil. Stuttgart. 1897.
五七 C. Menger: Untersuchungen über die Methode der Socialwissenschaften und der politischen Oekonomie insbesondere. Leipzig. 1883. IIIes Buch. Das organische Verständniss der Socialerscheinungen. p. 139—187.
五八 Small and Vincent: Intr. to the St. of Society. 1895.

の知きは實に此適例なり、リリエンフエルドの社會病理學亦頗る此に近し。

其一によりて、社會の成分たる衆人意識の統一を成せる者、卽ち社會の意識となる。

且暫く分析的理論を休めて、之を事實に見るに、社會が純然たる機制の體系にあらざるは勿論、社會有機體の一體としての行動が、全然盲目的にあらずして、多少昭明なる意識を伴ふ行動なるは明白なり。かゝる社會の意識の本源如何、その寓する所如何、社會の意識と個人の意識との關係如何、の諸問題は、今玆に細說する限に在らざるも、社會有機體が意識ある體なること、事實上亦確なりといふべし。

社會の意識といふ語は個人の意識といふ語より導ける者にして、別異の意義あるが如く見ゆるに拘らず、實は同義なることを注意せざるべからず。個人の意識は、吾人自個の心的行動に省み、心理學の研究法に特有なる內省法の助によりて、吾人の自覺により直に其存在を認識するを得れども、玆に所謂社會の意識の存在は斯かる單簡なる方法によりて認識せらるべき者に非ず。個人の意識は、心的行動の用について概稱せる者にして、其體は無意識なり、卽ち個人の意識を認識する者は個人にして、意識其者にあらず、人は意識に表るゝ觀念を介して意識を認識す。社會の意識も亦此と同しく、意識自ら自個を認識せずして、之を認識する者は卽ち社會なり、社會は社會現象により、社會の成分たる個人の觀念を介して意識を認識す、卽ち社會の意識も亦其體に於いては無意識にして、之

を社會の意識といふは、其用について下せる名稱なり。是故に社會の意識も亦個人の意識の如く、內省法によりて認識せらる、蓋し社會の成分其者によりてする社會の心的機能の了知は、卽ち社會の內省法に外ならざればなり、內省法の社會に於けると、其個人に於けるとの差異は、唯複雜の程度の差異に過ぎざるなり。

抑、意識の觀念は、宇宙現象の連續に在りて、單になる所の現象を超へて多少する所の現象に至るに於いて、其基底に存する本質に名づけたる者に外ならざれば、今社會現象を目して意識的現象と爲し、社會を目して意識ある體と爲すを得るに至れるは、社會の有機體なるを認め得たる場合と同しく、社會の觀念の形成上、更に大なる進歩と謂ふべし。

社會は意識ある體なりといふも、毫も其意識の初等若くは高等の判定を含まざるは、前節社會は有機體なりといへる命題に準す。且意識その者は、本來初等高等の別ある者に非ざるなり、故に强ひて其判定を明にせむとするは無意義の事たり。

社會意識論の史的重要は、人格論と共に、次節に附論するを可とす。

社會の意識の詮議に於ける一大困難は、其物質的基礎如何といふに存す、此點に關し未だ明答を與へたる學者を見ず。然れども吾を以て見れば、意識の物質的基礎を繹ねて、特に一定の機關を確定せむとするは、未だ開けざりし生理學の陳說に坐し、個人意識の託する所を以て腦に歸し、これが類比を社會の意識に求めて得ず、乃ち斯學の一難題と速斷せるの過失なり。社會意識の物質的基礎は、亦其成分たる

衆個人の物質的基礎にあるのみ。近く譬を取らむに、ライデン罐の蓄電性は、錫箔にあらず、又玻璃罐にもあらず、乃ち其兩者より組成せる全體の裝置是なり、バッテリイの蓄電性は、更に箱底の錫箔、球頸を連結する杆によりて、全數のライデン罐の電氣の如し、譬喩と雖も以て思半に過ぎむか、其錫箔杆等の何者たるかは今詳說の限にあらず。[五九]

第七節　社會は人格ある體なり

社會の觀念は、漸く進みて意識有る體といふに至れり、而も是れ如何なる程度に於いて有する意識なるか、社會の意識は、劣等生物に於けるが如く、單に自動收縮性と感動性とを表すに止まるか、將た高等なる生物に於けるが如く、意識の高等なる用を表して、一面には高尙複雜なる智能に發達し、一面には觀念の刺戟的性質を以て高尙複雜なる動機と目的とを有する行動を成すに至れるものなるか、之を攻究するに於いて、始めて社會の觀念を得惡くすに近づけりとすべし。

社會の意識は、本源を其成分たる衆人の意識に存す、社會の意識は衆人の意識の統一なるを以て、其作用の程度、亦個人の意識の下に在るを得ず。但し意識といふ語は、一切の心的現象の舞臺について名づけたる者にして、本來意識に初等高等の差別あるべき者に非ず。社會の意識は人の意識なりと謂ふは、社會の意識的行動は人の意識的行動なりといふを言ひ換へたるものにして、卽ち社會的

五九　第二卷第三篇以下に詳なり。

行動は人的行動なり、社會的現象は人的現象なり、といふことなり。

凡そ人的行動の主體を名づけて人と謂ひ、人の人たる所以に名づけて人格と謂ふ、之を人格の形式上の義解と爲す。形式上の義解は、如何なる場合にも不變一樣なり。人格の實質上の義解は、倫理上、法律上、社會上、等に用ゐらるるに隨うて變ず。倫理上の人格とは、智情意の主體、卽ち所謂倫理上の行爲の主體たる一切の性質について命名せる者なり。法律上の人格とは、法律行爲の主體、卽ち權利義務の主體たる一切の資格について命名せる者なり。社會上の人格とは、協同生活の主體、協同行爲の主體たる、一切の性質資格について命名せる者なり。凡そ人格といふ觀念は、之を概約すれば、人が宇宙間一切の他の實在と異にして、最も發達せる個體、尤も進歩せる實在として、特有する性質を抽象せる者に他ならず。人格とは、宇宙萬有の問に於いて、人が特に人として有する性質機能の觀念に外ならず、と謂ふべきなり。人格なき者は人以下の實在なり。

今社會は人より成り、其行動は人的現象なれば、其人格以上の實在たるべきは明なり、卽ち社會は人なり、社會は第五に人格ある體なりと謂ふべし。

社會は人格ある體なりといふも、亦毫も其人格の高下の判定を含まざること、有機體、意識ある體を謂へるに異なることなし。人格とは人の人たる所以について命名せる稱呼なるも、原人、開明人といふが如き特殊の意義を含

むにあらざるなり。唯社會上の人格、卽ち所謂人の人たる所以の者の內容の分析記述は、更に詳にする所あるを要す。[六〇]

斯の如く、社會について擧ぐべき五項を說述し了れるも、社會の性質玆に盡きたりと謂ふに非ず、社會が此以上更に或る性質を有するや否やは、固より自ら別項の問題を成す。

社會の意識、社會の人格といふは、社會を以て人に近似せる者とするの類比に於いて既に包含せる所の思想にして、社會を目して單に有機體なりといふに比しては、大に進步せる思想なり。單に意識を認めざる者は、社會を以て動物に比し、若くは動物の社會を以て人に類比するの思想は、東西の思想界、古より既に之有りしも、是れ寧ろ幼稚なる想像にして、精細なる思索

六〇　第二卷第一篇第一章に人を論ずるに當りて參看すべし。社會は有機體なりといふも必ずしも一切の社會が一切の點に於いて有機體と同しく、社會には人格あるといふも必ずしも一切の社會が發達せる人格を具ふるに非ず、未開人よりは開明人よりは社會の人格に比せむ方よりは、直に社會人格說を以て個人以上の人格ありと推論するの誤れるは明なり。

六一　Lazarus und Steinthal: Zeitschrift für Völkerpsychologie. Lazarus の著述に Das Leben der Seele. Bd. I. Berlin. 1883.(III. Aufl.) Bd. II. 1885 (III. Aufl.) Bd. III. 1892-(II. Aufl.) あり。Bougle: Les sciences sociale en Allemagne, Partie I. Lazarus. La Psychologie des Peuples. P. 18—42 に之を詳論せり。

六二　Steinthal の著に Philologie, Geschichte und Psychologie; Allgemeine Ethik; Einleitung in die Psychologie und Sprachwissenschaft. あり。

六三　Paul: Paulische Werke. Halle. 1886.

六四　Wundt: Philosophische Studien IV. 1886. Grundriss der Psychologie. 1896. Völkerpsychologie.

の結果に非ず。是を以て近世科學的思辨の潮流湧き出づるや、社會は先づ有機體との類比を以て解釋せられ、次いで動物との類比となり、最後に人との類比を加へたる者は、近時起り來れる社會心理學者のこれに討究的思辨を加へたるなれり。這般人との類比に基礎を置きて、初めて一流是なり。一八六〇年、獨のラツァルス[六一]及スタインタアル[六二]は、文學者、史家、言語學者、法學者、及人類學者と協力して、民族心理學雜誌を刊行す、是れ近時此研究の組織的嚆矢といふべし。獨にては爾來バウル[六三]、ヴントあり[六四]、墺にリンドネル[六五]あり、相次いで此研究を進捗す。ブウグレエ曰はく、心理學が個人の傳記を說明するが如く、社會的學科は、人間全般の傳記を說明する、卽ち歷史を說明する一の心理學を探討す、是れ蓋し今日斯學の第一要事ならむと。グムプロヰッツ[六六]、ラッツェンホオフェル[六七]の如き、皆之を社會學の一大基礎として、各體系を構成するに力め、近時佛のタルド[六八]、ルボン[六九]、米のギッディングス[七〇]は、亦尤も熱心に社會學の心理的構成に力め、乃ち模倣、群人心理、同類意識、社會化等の說あり。露のノヰコフ[七一]亦頗る之に贊して、個人意識と社會意識との類比を吟味し、こは

全く實にして空に非ずと斷ず。獨りフイエエは少しく之に反對して、謂ふ、純粹に實驗的生理的及心理的見地よりすれば、一切の個人的意識は集合的意識なり、衆多意識の意識なり、是れヘッケル、ハルトマン、ルナン、エスピナス、及シェッフレエの說く所にして、吾亦之に贊す、然れども其逆に、一切の社會的意識は個人的意識なり、社會は心理的に自存の一大個體なりとは未だ言ひ難し[七四]と。又謂ふ、我の意識と社會の意識とは契約的有機體の中に合成せらる[七五]、此有機體は社會有機體と契約社會との合成なりと[七六]。要するに、氏は甚だ社會意識に贊成せず。抑〻社會は心理的に一大個體なりといふは、必ずしも一切の社會的意識が個人的意識なるを意味せず、氏の駁論は其要を得ざる者と謂ふべし。氏の近著は、此問題に關しても亦頗る溫和の態度を取るに至れる者の如し、其他ヲルムス[七七]、ジェッフレエ[七八]、英のサレイ[七九]の如き、皆多少此問題の重要を說き、有機體說の驍將リリエンフェルド[八〇]も亦之を等閑視せず、社會の腦神經系と題して、多少此に觸着するあらむとせり。

諸家の內、社會研究の基礎を一面心理的に求めむとする者は、多く

六五　Lindner: Psych. d. Gesellschaft. Wien. 1871.

六六　Bougle: La science sociale en Allemagne p. 20.

六七　Gr. d. Soc. IV.

六八　Wesen u. Zweck der Politik. 1898. Bd. I. —: Soc. Erk. II. Psychologische Grundlage d. Soziologie. 1895.

六九　Tarde: Les lois de l'imitation. —: La logique sociale. 1895.

七〇　Gustave Le Bon: Psychologie des Foules. 1898. —: Psychologie du socialisme. 1898. —: Les lois psychologiques de l'évolution des peuples. 1894.

七一　Th. of Socialisation. 1897. 等

七二　ヘッケル等の說は、約言すれば、父母より子の意識は生じ、社會より反映して、各個人の意識生ず、とする大旨とす、故にフイエエは衆多意識の意識なり、の語あり。

七三　Consc. et vol. soc. p. 21—31.

七四　Sc. soc. cont. p. 227.

七五　同書　p. 400.

七六　同書　p. 390. 本文の論旨は、契約社會は衆多個人の意識を設想し、社會有機體は一の個體と意味す、より此二個の合成なる契約的有機體の中に、社會の意識と我の意識とが合成せられて、大我の意識となる、との意なり、即ちフイエエは餘り社會的意識の獨立存在を明認せざるものなり。

七七　Org. et Scc. Chap.

社會の一體としての觀念を固め、社會の諸種の理法を正當に解明するに進むも、或は亦單に類比を以て說明の能事を了ふとするの流弊に陷れる者なきに非ず、スモオル、ギンセント[八一]の如きは其適例なり。獨立の研究を爲し得ずして、類比に賴りて僅に學科を成さむとするの陋は、每に斯に至る。抑〻類比は設想を促すに足れども、到底之を以て一個の學科を組織すべきに非ず、類比によりて成れる學科は、究竟一個の隷屬的學科たるに過ぎざるべき者たり[八二]。社會心理學も、久しく既に斯學の要素を形成せるが、其成熟に於いて尙未だ疑なき能はず、後學の鑑るを要する所とす。

社會の心理學的研究は、其初め民族心理の研究に端を發せること、既に看たる所、其後斯研究の大に發達せる、茲に截然たる二派の研究を生せり、一は各民族の心理を研究するものにして、所謂民族心理學を成し他は一般に社會實在の心理的現象及理法を研究するものにして、卽ち適當に謂ふ所の社會心理學を成す。其濫觴の同一を以て、其下流の派別を混すべからず。

X. Fonction de relation.

七八 B. u. L. d. Soc. Körp. Bd. I.

七九 James Sully: Pessimism. 又 Ward. Psychic Factors of Civilisation は近者頗る此に留心せり。

八〇 Ged. ü. d. Sozialw. II. Bd. Kap. IV. u. IX.

八一 Introd. to. the St. of Soc. 此書は社會組織學、社會生理學、社會衛生學及社會心理學の諸篇より成る。

八二 例へば支那に於いて、自然科學の發達せざりしは一は、粗笨なる五行說の類比の羈絆を脫し得ざりしに坐するの類なり。

第八節　宇宙萬有に於ける社會の地位

人格以上、社會が更に幾許の性質を有するかの吟味は、此第二解義の期する所に非ず。上來五節社會の觀念の內容について略、得る所あり、今更に其外位について考察し、宇宙萬有の實在界に於いて社會が占むる所の地位を一考すべし。

宇宙萬有を大觀するに、二樣の方法あり。其一は直に宇宙の全般について抽象概括分析を試むる者にして、哲學者の觀察法これなり、其結果は、宇宙を以て、抽象的體系卽ち個々實在の體系、一名萬有の體系と爲す。[八三]今宇宙萬有に於ける社會の地位を決せむと欲するは、此具象的個々實在の體系に於ける其地位を決定せむとするに外ならず。

具象的體系に種々あれども、今日最も進める完全なる者は、進化的體系是なり。宇宙の萬有は、無機物と有機物とより成る。無機物は常に其まゝに存在す、其個々實在を成すより見ては之を無機體と名つく。有機物は、或は其まゝに存在し、或は更に有機體質、又は具機物を成す、凡そ有機體は必ず具機體なれども、通常有機體といひて具機體と

八三 佛敎の宇宙觀察は往々此兩樣を混合するの弊あるに似たり。

いはず。有機體に三級あり。第一、單一の具機體より成る者、細胞、モネエレ、是なり。第二、數多の具機體を其體制の成分として成り立つ者、一切の生物學上の個體、是なり。此第一及第二を併せて、生物又は生體と總稱す、其最上地位を占むる者は卽ち人なり。第三、數多の生物學上の個體を體制の成分として成り立つ者、社會卽ち是なり。最も嚴密にいへば、生物學上の個體は、人の外、社會を組成する者なし。

是故に、社會は、宇宙萬有の間に於いて、最も發達せる、最上最終の一節を占むる者なり。

無機物と有機物との間に毫も截然たる區劃なきの事理は、化學の發達によりて證明せられ、[八四]有機物具機物の間に毫も截然たる區劃なきの事理は、生物學上の化學の進

八四　一八二八年獨逸の化學者ヲエエレル創めて尿素を合成す、其法炭酸石灰に炭を混じて高熱し、窒素瓦斯を通じてシアン加里を得、之を沸騰して尿素を得。其後佛國のベルトレエは一酸化炭素を苛性加里の熱溶液中に導きて蟻酸加里を得、これより容易に蟻酸を得たり。是れ無機物と有機物と根本的區別なきの證なり。

八五　原形質は、(一)炭、水、酸、窒の四元素より成る蛋白質、(二)含水炭素化合物、(三)脂肪、(四)水、の四要素より構成す。原形質の混沌たる塊を總稱してシトオドといふ。其少しく進むや、核を生ず、核あるシトオドを細胞といふ。此過程は生物學者の毎に實驗する所なり。原形質は有機物なり、細胞は具機物なり、これ有機物と具機物との間に根本的差別なきの證なり。尙 Haeckel: Natürliche Schöpf. ungsgeschichte. IX. Aufl. 1898. Bd. I. を參看すべし。

八六　Haeckel. 右の書を看よ。Darwin: Origin of Species, by means of Natural Selection. 等。

八七　Darwin: Descent of Man. Lamarcke: Philosophie zoologique. 等。

八八　リリエンフェルド其 Zur Vert. d. Org. Meth. in d. Soc. の劈頭にいふ、人類が動物的狀態より長成せし以來、常に其同類と社會的關係に於いて棲息せり、純正なる人間的資質、天性、及心的能力を、人は其他人との交通によりて得たるなりと。

歩によりて證明せられ、[八五]一切の生物の間に截然たる區劃なきの事理は、生物進化論の發達によりて證明せられ、[八六]隨うて人も亦、生物界に於ける進化の或る程度に於いて、生物の種の發生に普遍なる化醇の理法によりて、發生する者に外ならざるの事理は、證明せられ、[八七]而して社會と人との間も、成立の次第に於いて本末前後の區劃なき所以、亦社會學の發達によりて證明せらるゝあらむとす。[八八]かくて社會の論究は、宇宙萬有の間斷なき、而も進歩の順序に隨うて排列せる、連續の最終の一段節の論議に外ならざる者となるなり。是故に、進化の次序に隨うて宇宙發達の時期の區分を爲すときは、當初に進化の豫件たる物質及エネルギイありて、先づ物理化學的宇宙の存するあり、而し

て天體の進化起るや、竝に星學的宇宙あり、漸く進みて生物の進化起るに及びて、乃ち生物學的宇宙あり、其更に進みて人類の發生あるに及びて、竝に社會學的宇宙あるに至る、是れ卽ち社會的人的進化の時期たり。這般宇宙の四大時期といふものゝ、實は全く便宜上人爲の區劃にして、各期の間、毫も天然的境域の截然たる者あるに非ず。

社會を宇宙萬有の最高とするに對して、人を最高とせむとするの異說あり。ラッツェンホオフェル[八九]の如きは其最なり、謂へらく、社會は所規にして人は能規なり、能規を以て所規の下に置くべからず、且人は全體として力なきも個人として有力なり、社會性と個人性とは相衝撃すと。然れども、個人性と社會性とは相待ちて共に全く、其間偏に能規所規の關係を立つべき者に非ず。スペンサル、遠くはコムト等社會を以て最優位に置くの見解は、本文の所述に合して、構成の單複、進化の次序より立せる者なり、ラッツェンホオフェルの說は、未だ之に對して強き駁撃と爲るを得ず。或は人と社會との間に格別の軒輊を論せざる學者あり、是れ寧ろ穩當に近きも、近切ならずといふべし。但しスペンサルの超有機體の說は、亦未た充分明晰と許すべからず、是れ吾が本文の說ある所以なり。

八九　Ratzenhofer: Soc. Erk. p. 11.

第九節　社會の觀念

上來六節の敍述を累ねて、略社會の觀念の要點を擧げて、社會とは何ぞやといふ疑問に對する第二解義を得るに至れり。社會の研究、卽ち此疑問に對する第三解義の探究に向うて出發するが爲には、粗以て充分なる社會の觀念を得たりとすべし。今上來の造詣を束ねて、方式的に社會の觀念を記述すること、左の如し。

社會は衆人の協同生活の有機的人的渾一體なり。[九〇]

此解義既に定まる、乃ち容易に左の三項の推論を演繹すべし。

第一、宇宙の事物に在りて最も人生に直接なる關係ある者は社會なり。細胞の生物に於けるが如く、人の社會に於けるや、其有機的成分として存立す。社會といへば人生を言はざるを得ず、人生といへば社會を言はざるを得ず。故に本項の命題あり。

第二、含蓄的意義に於ける人生は卽ち社會なり。人は既に社會の有機的成分として存立し、且社會の意識及人格の本源となり、以て社會に高等なる性質を與へ、以て自ら高等なる機能を全うす。社會を離れむか、人生は其最も

九〇　之を外譯すれば、The Society is the organic, personal unity of the association of men. La société est l'unité personnelle et organique de l'association humaine.

九一　コムトの社會の觀念もリイツの結集あり（スタインの Soc. Frage etc. 四八二丁）て明なるを得たるのみ、タルドは其 Lois de L'imitation 七三丁に定義を擧げたりコムトの義解は左の如く、正鵠を射たるは勿論なれど正しく繁冗に失するの嫌ありといふべし。自然基礎より繼續的進化の能力を具備し、固結及信頼の連鎖を以て密に結合せる衆部分の自由從屬の主義、及同等にして普遍なる道德的及智能的世界觀の基礎、此兩者の上に立ち、道理に率由せる習練と體制とを以て成立せる、人衆の協同一致、これ卽ち社會なり。タルドの義解は左の如し。相互に模倣の行徑に於ける實在の聚合、若くは見在模倣を成さぬまでも、相互に類似して且其共通相が同一模型の舊き複寫なる、實在の聚合、之を社會團聚の定義とす。氏のは例の模倣說より來り、定義としては其要を摘まむとして却りて偏局に陷れるの感あり。F. Tönnies: Gemeinschaft und Gesellschaft. 1887. p. 46. は更にゲマインシャフト及ゲゼルシャフトの區別を設けて、いふ、乙は甲の

高等なる意味を失ふこと明なり。故に本項の命題あり。

第三、宇宙は社會に對して從屬的實在なり、殊に人間理想上の見解に於いて然りとす。社會は宇宙萬有の體統に於いて最高の地位を占む、而して其根本義は卽ち進化の理法にして、此理法は卽ち物的幷に心的、天然界幷に人界の普遍理法として立てる者なり。故に本項の命題あり。

上の三命題は、本章の講明より直に得たる推論なれども、更に之を吟味すれば、種種の重要なる結果に到るべし、但し是れ自ら後卷の事功に屬す。

此解義より以上、社會の觀念の分析は、第三解義の探討に屬す。今や上述の解義を以て、方に社會研究の端緒を發き得たりとす。

社會は社會學の對象なれば、其解義は諸書宜しく明に之を擧ぐべきに、殆ど之を見ること罕なるは、其簡なるは効益少く、効益あるべきは全般の敍述に須つが爲なるべし[九一]、吾が第一乃至第三解義の次序を設けたる所以、茲に存す。

社會といふ語は從來頗る濫用を蒙れり、然れども、其弊、觀念の模糊又は缺欠を來せるのみ。今最も注意すべき者三あり。第一は社會の事象中、政治、經濟等特定の名目以外、一切を凡稱して謂ふ所の社會にして、こは主として社會的といふ形容詞の形にて用ゐらる、其範圍は固より場合によりて不定なり。第二は國家に對する社會にして、こは人間社會の見在狀態より、一切の國家的要素を抽象せる殘餘の觀念なり。第三は個人に對する社會の觀念中、個人と社會との相對相異の點のみを抽象して成せる觀念なり。社會主義の社會は、始は第二第三を兼ね、後には第三のみとなれり、常話の社會は、多く第一なり[九二]。

九一　如く相隣相好の生活を營む人類の團聚なれども、甲の本質が個々結合せるに反し、乙は本質上より個々別離せりと。氏の說巧妙なれども茲に社會の第二義を解するに際しては、尙過不及の欵を免れず。

九二　ミュンヘンの敎授 Karl Wasserrab: Sozialwissenschaft und soziale Frage. 1900. 氏は社會の觀念を左の如く區別せり。(一)全然離群索居に考へらるゝ個人に對し、外面上より規律ある。(二)無制的結合に對し、法制的規律ある。(三)目的ある計劃に隨うて直接に生成せる。之を分ちて次の二とす。(四)政治的に對する社會的。(五)假約的の社會交通に於ける社會的。面白き考案を含むも、雜駁にして不純の弊あるが如し。

第二章　社會學

第一節　學問

社會學とは何ぞや、といふ問題の理論的研究を試むるに當りて、其冠位の概念たる學問を解明するは、至當の順序なるべし。

凡そ人生の事業は、皆一定の目的の爲に存立す。若し目的を明確にせず、輕忽に着手を急がむか、失敗に了らざる者幾と罕なり。學問は極めて重要なる人生事業の一たり、學問の目的は果して何ぞや。

一言にして學問の目的を擧げば、人生に於ける進歩卽ち是と謂ふ可きなり。進歩の完全なる意義は、學問の全體系を須ちて始めて詳悉すべきも、其包含の大要を了知するに非ざれば、以て學問の目的を了知するに難し、故に學問の始程は、又進歩を大體に解明するに起るの要あり。

人生は行動云爲の連續なり、卽ち目的ある進動の連續なり。目的ある進動は、する所の現象にして、なる所の自然現象と相對す。凡そする所の現象は二個の要素を豫想す、卽ち理想及實現にして、又之を知及行といふを妨げず。人的現象は究竟理想の實現に外ならず、人生は知行の連續に外ならざるなり。

更に進みて之を吟味するに、斯く人生をして知行を以

一　世多く理想と現實とを相對せしむるも、これ未だ精密といふべからず。凡そ理想(Ideal)は見在(Actual)に滿足せざるより起る、卽ち理想は多少必ず見在を改革(Reform)せむとする者なり、改革は卽ち理想の實現(Realisation)なり。而して其結果は進歩(Progress)なり。

二　萬象恒常は、輓近自然科學者が Constancy of the order of Nature といふと殆と同義にして、唯 Nature といはずして萬象といひ、宇宙を特に天然といひて人界との對立を意味するの嫌を避けたるのみ。

三　理は Reason, Logos に該り、則、理法は Law に該り、學理は Scientific Law に該る。

四　ル、スタインは Wissenschaftlicher Imperatif といふ語を掲く、是れコムト以來の實理哲學の旨にして、東洋從來の教諦に於ける學、知の言辭の基底に存する觀念と、正に同義なる者。蓋しカント曩に Kategorischer Imperatif の語を掲げてより、示命といふ語が知行の連鎖たる人義は一定し、而して實踐哲學上の一大進歩を成せり。吾此書に於いて、學問

て存立し得可からしむる究竟原理は、卽ち宇宙に於ける萬象恒常[二]卽ち理[三]其者に外ならず。全般的見地よりは之を理といひ、特殊的見地よりは之を則といふ、物有れば則有りといふは、卽ち萬象恒常の宇宙に普遍なるを謂へるに外ならず。是故に知は宇宙の事物に就いて此物、此則を知る事に外ならずして、行は斯くして知れる所の者、卽ち宇宙事物の理法、卽ち則に隨うて行動するの謂に外ならず。知を呼びて理想となし、行を呼びて實現となすは、亦此義に本づくのみ。理想を闡くは知を致すなり、知を致すは物を格するに在り、物を格するは則を得るに在り。學問以て此則を得、之を名つけて學理といふ。學理は卽ち學問的示命[四]なり。理想の存立し進歩するは、此學問的示命に率ふ者

的示命、實理的示命といふ、亦示命の義に於いてカントと同義なり。

に外ならず。卽ち學問愈〻進みて、理想愈〻進み、實現亦益〻進む、斯かる知行の進步は卽ち人生の進步なり。

這般人生を成す所以の二要素たる知と行とに於いて、此二者を併せて其完美を期するは、卽ち人生の完美を期する所以なり。乃ち此事功を目して學問とするは、古代哲人の敎諦、每に見る所にして、殊に支那本來の學問の性質なりき。[五]而も人生事業の進むに隨ひ、複雜多端の加はるは必然の勢にして、爾後東西一般に學問といふ所の事功は、常に知の方面のみに限らるゝに至れり。而も其範圍の減縮は、以て其性質を變更するに足らず、其理法との關涉、其人生との關係は、毫も之が爲に變更を受けざるなり。學問は人生の進步の根底的要素にして、若し人生と相關せざ

五　所謂學問思辨行の五程、一氣直下なる者これなり。

る學問の存するが如く見ゆるあらば、是れ見る者の妄に非されば、則ち學問の似て非なる者なり。

以上、大要に於いて進步の義を解し、學問の目的を解せり。此目的の爲に或る方法を執りて以て致知の功を成す者、卽ち學問なり。[六]

學問の方法に三段の種別あり、[七]第一種を獨斷的方法とし、第二種を懷疑的方法とし、而して第三種を批評的方法とす。

第一。獨斷的方法は、知識を以て究竟と爲し、其由來、隨うて其實質の吟味を無用とする者なり。此方法の成果は、其性質に伴うて、停滯不進步を現す。獨斷の形式に二種あり、一は他に依りて知識の存立を成す獨斷にして、二は自に

六　こゝには學問は總體唯一についていふ。コムト曰く、今日の研究の對象は實は一なり科學の區分は畢竟人爲的なるのみ。(Comte: Cours de phil. pos. I. p. 37.)

七　此三段見解は、形式に於いてはヘエゲルを推すべきも、實質に於いては實にコムトに負ふものと謂はざるべからず。但し吾が見解は、少しくコムトと異なるも、三段に分つの根基は遂に其外に出づること難し。

依りて知識の存立を成す獨斷なり。他に依る者は、傳說、師傳、宗教の教條、古典の所說、他國の風俗教說等を、何等の分析と吟味とを用ゐず、偶、或は分析と吟味との動念の萠すことあるも、力を用ゐて之を芟除し壓抑し、成るべく所動的に這般を受容して以て知識の存立を成さむと期す、卽ち完全に獨斷的方法の形式を具ふる者にして、模倣の形式卽ち是なり。自に依る者は、自個の見聞思念等より結果する資料を以て究竟の知識と爲し、亦之に向うて分析と吟味とを用ゐざる者、卽ち所謂常識を重んずるの過大なる者是なり、之を常識の形式と呼ぶを可とす。凡そ獨斷的方法の行はるるや、實は未だ學問の要の知らるる者と爲すを得ず、獨斷は寧ろ學問無用主義なり、就中模倣は殊に

八　コントの所謂神學的時期これに壓す、然れども此と同科なる思想明は、ひとり神學のみに非ざるなり、宗教の教條の外に、傳說、師傳あり、古典聖賢、外國崇拜等皆此と同科にして、個人としては知見の未だ開けざる者、社會としては未開若くは半開の社會に毎に見る所とす。

九　常識の形式の跋扈する間は、學問尙未だ大に開くるを得ず是れ西學の甚だ說かざる所なれども、頗る注意を要する事項とす。

一〇　宗教、古典、他國、等の崇拜が、如何に實理的學問を敵視し抑壓するかの實例に徵せば、思半に過ぐる者あらむ。

學問抑壓主義なりとす。[c]

第二、懷疑的方法は、始めて知識の存在の由來、隨うて其實質を稽査するの必要を感知して、而も未だ如何にして之を成すべきかを解せざる者なり。此方法の成果として、思辨の錬習は則ち空し。懷疑的方法に二種あり、甲は消極的懷疑にして、知識其者の存在を疑ひ、隨うて實在其者の存在をも疑ふに至る者。乙は積極的懷疑にして、疑問に累ぬるに疑問を以てし、解明に積むに解明を以てし、究竟疑問の根本に於いて解明すべからざる疑問の存在を見、而して全般の解明亦遂に疑問を脫却せざるを致す者なり。[二]此兩者共に所謂形而上學なる者に屬すれども、甲は就中懷疑哲學を以て目せられ、乙

一一　コントが總稱して形而上學的時期といへる、當れり。通例謂ふ所の哲學なる者、或はここれに屬するあり、又或は第三種に屬する者あり。其俗より受くる名稱の爲に其實質上の價値を誤ることなきを要す。

は形而上學の稱を受く。乙に於ける實理的造詣は、知識の說明たる認識論是なり。認識論を以て哲學の最大要素と爲す者の外、形而上學の學問的效果は茫漠の間に存すとせざるなし。

第三。批評的方法は、思想及事物の實理に照準して、思想及事物を批判し、以て實理的知識を結果する者なり。此方法の成果は、卽ち實理的學理にして、眞に學問の目的に副ふ所の者なり。此方法には、種別の擧ぐべきなし、若し二種の相反せる形式を呈するある、是れ其一方若くは雙方が部分的たるに止まるか、若くは誤謬あるを證す。批評的方法は、其成果より名つけて、實理的方法と謂ふを得べし。[二]學理が眞に其本來の面目を充分に發揮するは、唯、此方法によれる學問の學理あるのみ。上述學問の目的を達し得るは、唯、此方法あるのみ。

[二] コムトの所謂實理的(Positive)時期、卽ちこれなり。其含蓄を檢査すれば、頗る其要求に副ふ者あるを見るなり。

此三種の方法は、方法に於ける尤も根本的なる、大體に於ける區分にして、其細目に至りては、學科によりて亦差異あり、今詳說の限に在らず。

學問の解義は玆に與へらるべし、卽ち左の如し。

學問は人生に於ける進步の爲に、實理的示命を供ふる者なり。[三]

學問の方法を誤るより來る謬見は、略、上述によりて見るべし。今學問の大體に關して世俗の近く陷り易き謬見を察するに、約二種を得、一を學問神聖主義と謂ひ、他を學問無用主義といふ、甲は謂へらく、學問は其者自個に於いて絕對的尊重の價値あり、夫の何が爲に人は學問するかと問ふが如きは、學問の神聖を認め得ざる者なり、學問の目

[三] 之を外譯すれば左の如し。
The Science is what provides the Positive Imperative for the Progress of Huinan Life.
La Science est ce qui pourvoit l'impératif positif pour le progrès de la vie humaine.

的は學問其者に外ならずと。かゝる套言は、國家神聖主義、美術神聖主義等と同じく、獨斷迷信の一種に過ぎず。思ふに此見解は、世間往往營利の爲に學問する者あるに對して、之を排斥するより起れる者、學問の目的は、實は學問其者よりも重要にして大體に關する者あるを解せざる者なり。近時ラッツェンホオフェルは、快辯を以て之を詳明し、[一四]知識欲の充足を以て學問の要諦と爲す獨逸哲學の弊、實に古典教育の爲に良知良識の蒙蔽痲痺を來せる獨逸教育の弊竇に鍼するあり、[一五]學問の目的ある吟味は、漸く佛國の思潮の獨占を離れ、獨國半世紀前哲人の思潮の復興を見るの兆あるは、慶すべし。斯く一方に學問神聖主義を奉じて、盲目的に學問の事に從はむとするものあるに對して、他方には學問無用主義を奉する者あり、謂へらく、人生の事業は進歩にあるも、進歩の理想は學問を以て求むべきに非ず、學問は實地と異なり、學理は實際に適用すべき者に非ず、實地は宜く實地を以て律すべし、實際を指導する者は、實際の經驗及常識是のみと。是れ方法上には獨斷の乙種に屬し、遂に大體學問の深奥重要なる意味を拒否して、閑人の

一四　ラッツェンホオフェル曰はく、學問の目的を以て其自個に在りと爲し、知識欲(Wissbegierde)の充足に在りとする者は、コムトの所謂形而上學的思想の時期に普通にして、學問の目的の詮議を重要とし、目的を以て人生との關係効果に在りと定むる者は、其實理的思想に通有なり。(Sociologische Erkenntniss, p. 17.)又曰はく、學問を以て其自身の爲に攻究すべしと爲し、目的の意識を伴ふを要せずとする者は、所謂形而上學の徒なり、此徒の目的は既に達せられたるが如し、其無目的と稱する、亦理論的世界考察といふ目的に外ならず、而して近世の哲學といふ者を案し來れ、ショオペンハウエルや、ニイチエや、皆これ前に出でたる哲學系統の飄搖たる玩戲と過失の重複とに過ぎざるに非ずやと。(仝上 p. 15—16)

思ふに近時獨逸哲學の價値、亦未だ必らずしも斯の如く低き者に非ざるべきも、學界清新の氣運、ニイチエの破壞的懷疑哲學を出だし、次いで這般の實理的探究の萌芽を見る者なるべきなり。

一五　Haeckel: Naturliche Schöpfungsgeschichte I. p. 292—8　近時教育の弊を痛論して、所謂理想的青年教育と、實地世界、知識の進歩との不調和を罵り、現時の實地の知識の尤も乏しき神學者、法律家、及教師としての言語學者及歷史家等が、奇態にも今日の文明生活に尤も重要なる地位を專有せるを彈劾す。バウルゼンも亦一八九九年五月漢堡演說に於いて、現時獨逸の所謂古典的上品教育の、最早多少の改革を要すべきを述べたり。

一六　J. G. Fichte: Vorlesungen über die Bestimmung des

好事と指斥し去る者、而して學問神聖主義と同じく、抽象的原理を以て究竟の學理と爲し、直に以て實地の適用を要求する者と爲す、其失敗は當然なり。學理は抽象的原理なりとせば、是れ既に學理の其儘に實際に適用す可からざるを意味す、何となれば實際の世界は具象的渾一なればなり、則ち直に學理を以て無效とし、學問を目して無用とする、其過や彼自身に存す。學理は概括的原理なり、是を以て其形式や往往抽象的なり、而も學理は必ずしも抽象的ならず、隨ひて必ずしも其儘の適用を拒否せず。而して所謂經驗は則ち特殊的規定に過ぎずして、其積聚たる常識も、亦唯極めて雜駁不完全なる方法によれる較概括的なる命題を與ふるに過ぎず、常識の經驗に對する內容的優勝は、唯自然陶汰を經るの機會を有したるに在るのみ。凡そ是等の經驗及常識の示命的效力は、唯蓋然的に過ぎず、學理の概括的なる、之に加ふるに時處位の因子を以てして、乃ち玆に全しとすべし。學問に對する二種の俗見は共に謬れり。

學問の觀念の根本吟味は、獨に在りてフィヒテ、[一六]佛に在りてコムト、[一七]尤

も明確に之を論ず。此問題の餘りに根本的なるが爲に、歐西の學者は往往之を遺却するも、東洋の教諦は必ず先づ之を明確にするに學問の初程を起す。六經[一八]、諸子皆然り。太史公の歷史[一九]に於いてすら、亦尙學問の要旨を論ずるを遺れず、東洋學風の一斑、而も根本的なる一端を察すべし。歐西の學風、フィヒテの教諦は、多くの要點に於いて繼紹其人を缺きしも、コムトは則ち幾多の追隨者を出だし、或は孔子以後の支那教學[二〇]の如く、傳へて全からざるあるも、尙多くの要點[二一]を失はざるは慶すべしと爲す。學問を以て人生と親密なる關涉ありとする、東西の學風、今や漸く相近づけりと謂ふべし。

萬象理法の一貫は、東洋古來の教學に在りては綜合的に之を立せり。歐西に在りても、古代の哲學者は往々之を立せるも、中世宗教の跋扈に至りて、恒常の理法は氣儘なる神意に蝕盡せられぬ。近世人心の覺醒、新論理法の適用、諸般學術の勃興より、漸く一貫理法の觀念の再興を見るや、第十八世紀末の佛國學者は、往々進みて自然的理法と社會的理法との合一を說くに至り、以て殊に社會學研究の機運を促進せり。[二二]コムトの大成を經、スペンサル、ケエリイ、[二三]フィスク[二四]の如き、皆此運に乘ぜるものに非ざるはなし。[二五]近時フウルニエエルはいふ、人間進化は宇宙理法の引續きの發見の結果なり、卽ち諸現象の相互關係の了知及人間の此關係に順應することに外ならずと。[二六]萬象理法の一貫は、是に於いて堅確なる實理的基礎の上に立つに至れるなり。

第二節　學問の體統

學問は人生の進步の爲に實理的示命を供ふる者なり。人生は渾一なり、人生の進步は渾一なり。人生の進步の爲にし、且實理を探究せむとする者は、必ず宇宙の渾一的研究に出でざる可からず。蓋し宇宙は人生と契合す、或は人生を目して宇宙分內と爲し、[二七]或は宇宙を目して人生分內

Gelehrten.及Wissenschaftslehre. 1794.に關する諸著を尤も見易しとす。

一七　Comte: Humanité, Unité de Science の說を眼目とす。

一八　大學の劈頭、大學之道云々三綱領、尤も明晰に此形式及實質を現す。

一九　太史公自序傳參照。(史記列傳第七十)

二〇　所謂九家の學、道家及其流の幾分を汲むものなきに非されども、主として所謂聖人の學に源を發す、殊に儒學といふ者に至りては、悉く皆端を聖人に啓ける者なり。

二一　Humanité, Unité de Science. 此二綱は皆傳へて失ふことなし。Méthode positive は名義皆相同しきも內容に多少の差を生せり、Littré, Carey 等主として學問の本旨の吟味を解らず。

二二　A. Bordier: La Vie de Société. 1887. Chap. I. 此間の消息を傳へて詳なり。曰ふ、社會學の觀念は、博物學の如くアリストテレエス以後理晦に附せられ、神秘說及靈魂說によりて昧まされき、Quesnay に至りて、社會の社會的秩序の觀念を再び揭げ、Mercier de la Rivière は同しく政治社會の自然的及本質的秩序を說き、而して Quetelet は Condorcet の助言に隨うて其大著を Physique Sociale と名つけたり、此著の大旨は社會の進步及進化の規定は天然の管轄に存し、隨うて亦天體の運行と同樣に不可紊の理法に率ふ者なるを明證せむとするに在りと。ボルヂエは頗る物質論に傾けど、宇宙理法の一貫の觀念が漸々學問的根基を獲來れるの狀勢を叙して明なりといふべし。

二三　Carey: The Unity

と爲すも、[二八]こは觀法の差異より來る結果の小差異に過ぎずして、宇宙人生の契合[二九]を立するには均しく共に幇助を供ふる者なり。

學問は本來一あるのみ、學理は是に於いて單立すべく、兩立あるべきに非ず、若し兩立する學理の相撞着し若くは相反對するが如きあらば、是れ其一方若くは雙方の虛僞に坐す。學問は常に人生を目的とし、宇宙を對象とす、乃ち人生宇宙の渾一なる限り、學問の渾一は失はれず。主觀より目的といひ、客觀より對象といふ、人生と宇宙との契合は、卽ち目的と對象との契合を意味す。學問の渾一は、此契合の渾一なる體を以て根本の要諦と爲す。

宇宙萬有の具象的體系は進化的體系を以て尤も完全と爲すこと、[三〇]既に之を看たり。進化的體系は、同一時間に在りて空間を緯とする、換言すれば種類の觀念による萬有の體系を與ふると同時に、亦同一空間に在りて時間を經とする、換言すれば變遷の觀念による萬有の體系を與ふる者なり。是れ此體系の尤も特長とする所なりとす。萬有の進化的體系は一の體統[三一]なり。體統の各節は、具象的には固より其實質を異にすれども、抽象的には、第一は第二に含まれ、第二は第三に含まれ、逐次斯の如くにして、最終又は最高の一節は、其實質に於いて一切を包含す、卽ち體統の體系なり。其最始の一節の對象或は實質は、全く他の包含を有せずして、卽ち知識上尤も單純なる實在なり、抽象

of Law, as exhibited in the Relation of Physical, Social, Mental, and Moral Science. 殊に其第一、二、三、四章は本節所說の諸問題を詳論す。

二四 J. Fiske: Cosmic Philosophy.

二五 R. Federici: Les Lois du Progrès déduites des Phénomènes naturels. 1891. 赤格物致知と人間社會道德の進步との關係を論じて曰ふ、道德的進步は人間知能が宇宙の理法を知得し萬有の秩序に契合して自個の行爲を遂げ自個の發達を實現するより成ると。

二六 Engène Fournière: L'Idéalisme social. 1898.

二七 常識の人生觀これなり。

二八 一種の唯心論者此觀を有す、その尤も著きは、陸象山の宇宙內事卽是人生分內事といふに見るべし。

二九 合一哲學の見地は茲に到着す。

三〇 第一章第八節。進化の說明は後卷の要項なるが故に、今これを爲し難し、叙述は成るべく論理的順序を逐ふを期するも、複雜なる全體の立論上、かゝる事は亦已むを得ざるなり。「此說述に至るまでは、進化の大體の義解は既に之を有する者として說述す。

三一 體統相屬といふ熟語あるより、Hierarchy と體統とは同義に使用するを得べしと考ふ。

三二 論理學にて
劣位 Subordinate
同位 Coordinate
優位 Superordinate
といふ語を襲用す。

の極に於ける觀念なり、斯かる觀念は、知識として一切の實質を有せざる者にして、卽ち知識の純然[三三]たる形式觀念ならざるを得ず。而して體統の最終の對象或は實質は、知識上一切を包含する觀念なるが故に、渾一的最高觀念、卽ち人生宇宙其者の實質觀念ならざるを得ず。

今進化的體系に準據して學問の對象を取るときは、宇宙萬有の進化的體系、卽ち進化的體統に應して、又學問の進化的體統を得べし。其體統に於ける最始の一節は、知識の純然たる形式觀念を對象として、先天實在を論究する論理學[三四]なり、之に次ぐ所の一節は、卽ち原始的宇宙を說明する物理學[三五]、而して後順次に宇宙進化の各段節に應する天體學、生物學、社會學あり。就中此最後に位する社會學は、

三三　カントの所謂純粹(Rein)といふ語は尤もよく此義を表現す。

三四　カント、ヘーゲル等の意義にて此語を用ゐる。茲にいふ所の學問の名義は、體統の各節の名義にして且根本的中心的なる者を指すこと、皆之に準す。これ後節科學の體系を說くときは、自ら異なるべき所とす。

三五　これらの學問の名目はそれ〴〵Logique, Physique, Astronomie, Biologie, Sociologie といふべし。

卽ち渾一的最高觀念を對象とする學問なり。今學問の體統を列記せむか。

第一、論理學。論理學は純然たる知識の形式を對象として、實在及知識の可能の第一原理を論究す、卽ち先天實在の論究に止まりて、人生宇宙と直接の關係なし。其學問上の價値は、尤も獨立の價値に乏しく、第二以下の段節と關係を有し得るに於いて、始めて多少の價値を生ずるのみ。其體は固より純然抽象的なり。

第二、物理學。物理學は進化を超絶する原始的宇宙を論究す、卽ち進化の與件の研究なり。其體象は客觀的實在を有すれども、未だ具象的實在を有するに至らず、是れ此段節が第一と共に理學の目を受くる所以なり。但しこは

頗る既に後天的客觀的實在に進めるが故に、學問的價値は漸く進むも、其充分なる價値は、次序を逐うて體統の全般に關涉するに於いて始めて完きこと勿論なり。

第三、天體學。天體學は進化第一期に於ける宇宙を攻究す、此第一期を一名星學的進化と謂ふ。進化の與件は、其儘に存在することなし、蓋し既に進化の與件といふ、其存在は直に進化的存在を意味す。是故に進化の與件の存在と同時に、第一期の進化は乃ち始まる。第一期の進化は無機的進化にして、卽ち星學的進化を成す。此段節より以後は、全く客觀的及具象的に完全なる對象を有し、各期の取扱は直に宇宙發達變遷の各期の取扱となる。乃ち最早純然にもあらざる者となれるも、而も其後

なる段節の出現せる以降に在りて、尙特に其期に屬する事項をのみ取扱ふときは、亦抽象を免れず。其價値は、此期に在りて此期を取扱ふとせば、完全絕對なるべきも、此期は未だ此期の學問的取扱を爲すに堪ふるの要素なし[三六]、故に完全絕對なる價値は望むべからず、乃ち今此期に於ける宇宙を取扱ふときは、不完全絕對の價値を有し、此期以後に於ける此期の事象を取扱ふときは、全く相對の者となる。

第四、生物學。生物學は進化第二期に於ける宇宙を攻究す。第一及第二兩種の理學を以て其構成の資料と爲すのみならず、亦第一期の學問をも資料とす。然らざるは渾一的學問の旨を失ふ。其他其前後の段節との關係、其價値

[三六] 學問的取扱は必ず思想の大に發達せる後ならざるべからず、天體進化の時期は生物未だ發生せざるの時期なり、況や人をや學問なや。

は、全く第三に準す。

第五、社會學。社會學は進化第三期に於ける宇宙を攻究す。生物學が有機的進化を攻究するに對し、更に社會學は意識的進化を攻究する者なり。其前なる段節に對する關係は、全く第四に同じ。此學は現在の宇宙進化の段節に應ずる者なるが故に、斷じて抽象的取扱あるを容れず、其取扱は、體統の觀念の初より拒否する所、而も後なる段節の價値は常に絶對なり、卽ち前なる諸の段節より離れての問的取扱の要素も此期に於いて始めて完き者なり。學問は、主觀的方法の上にも、客觀的對象の上にも、獨り此段節に於いて充全なる面目を發揚するを得たりとす。

學問の體統は約右の如し、其純ら論理的なることは明なり。對象相互の進化的關係の如く、各段節相互の論理的進化的關係を詳に確に認取することを要す。

學問の體統の論定は、亦近世オオギュスト・コムトの偉功に歸せざる可からず。[三七]氏の博大なる頭腦は、學問の大觀を爲すに於いて此重要なる問題を遺却するを容さゞりき。其合理的なるは更にも言はず、當時の思想學問の進歩に應じて成し得べきを成せるは、誠に氏の偉大を表すと謂ふ可し、吾が聊か氏と撰を異にせるは、唯、氏以後に在りて世界人類が到達せる思想學問の進歩に應せるが爲のみ。氏を繼紹する者、亦皆此重要を遺却せず、乃ちフイエ[三八]エ、ド・グレエフ[三九]コオスト[四〇]の如き、各、多少の更修を加へたる說を出せり。然れどもコムト以後の諸氏の病は、純ら論理的なる學問の體統を以て、强ひて之を在來の科學の體系と調和せむとせるに存す。在來の科學の體系なるもの、多く各國各

三七　コムトの體統は左の如し

一、數學
二、星學
三、物理學
四、化學
五、生理學
六、社會學

（粗體の學問）
（具機體の學問）

（Cours de phil. pos. I. p. 7.）

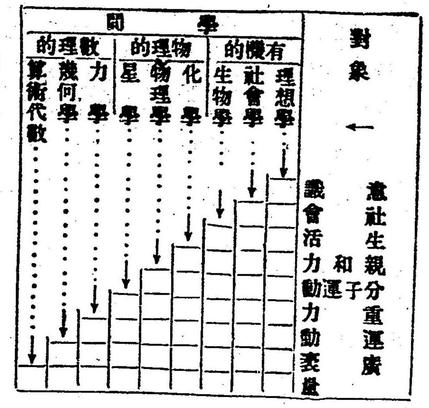
三八　Fouillée: Mouvement positiviste. p. 18. Chap. II. Hierarchie des sciences positives: Pluralisme et monisme scientifiques. 氏曰はく、新社會學の形而上的效果は、其宇宙論と實理的歷史哲學とを調和して學問の全體系を成せるに在りと。（Science sociale Contemporaine. p. 411）

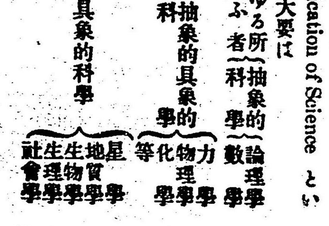
三九　De Gréef: Introd. a la Soc. I. p. 5. にいふ、若し社會學と

いふ學科にして成立せば、其諸科學より構成せるヒラミッドの尖頂に位すべきは誰も疑を容れざる所なりと。又（I. p. 92）いふ、社會學は心理學と生理學とを兩親とせる娘子なりと。氏の學問の體統は左の如し。

一、數學
二、力學（靜學、靜力學、動學）
三、物理學
四、化學及礦物學
五、星學
六、地質學
七、生物學
八、心理學
九、社會學

四〇　巴里前社會學會長 Adolphe Coste: Les Principes d'une Sociologie objective (p.57). 科學の百科的連續、及社會學の體統的位置を論ぜり。其原本的九科學を論するや、體統の關係を圖表せり、頗る面白し。





個の思想家、學者が、全體に關しては殆ど無意識的に、或は未だ大に進まざる不完全なる意識を以て、漸次附加せる一塊に過ぎずして、其間必ずしも論理的體系の認むべきあるにあらず、譬へば猶元素週期律の如し、幾多の疑問符號及缺陷を表中に存すべきは、固より必然なり。故に吾は全く此純論理的なる體統の說述と、在來諸科の科學の體系的分類とを區別し、甲を以て純論理的見地に屬し、乙を以て見在的見地に屬せり。純論理的なる者の著明なる一例は、スペンサル[四一]の科學の分類是なり、其說頗る詳密にして又正鵠を射たるに近く、且近時思想學問の進步に應ずるに足るも、氏の綜合哲學體系と襯合する關係を缺くに似たるは、惜むべし。ワアド[四二]は其見解に於いて極めてコムトを贊成し、近時ピイシ[四三]は亦特に一小冊子を著して、コムトを祖述するの見解を述ぶ。

甚だ學問體統の論を重んぜざるは、或は生物學的、或は心理學的、特殊的社會研究に急なる學者に於いて見る所にして、是等[四四]は社會學について直に其科學的範圍を定め、容易に其地位を決定し得たりと爲すも、實は社會研究の一部に向うて未詳を下せるのみにして、社會學本來の職能を全うせる者に非ざるなり。

諸家の得失區區なりと雖も、社會學の學問上の地位を見るには充分の參考たらむ。見在の諸科學との地位關係は今見むと欲する限に在らず。

第三節　哲學及科學

人事の取扱に於いて、極めて茫漠として曖昧なる名辭が、却りて便宜を與ふること、少からず、哲學といふ名辭、及近時に至るまでの科學の名辭の如きは、學問上に於ける これが適例といふべし。凡そ此類の事象に毎に見る所の

四一　Spencer: Classification of Science といふ小冊子なり、其大要は現象が吾人に見ゆる所の形式を取扱ふ者（科學）（數學）（論理學）（抽象的具象的科學）（物理學）（化學）（星學）（地質學）（生物學）（生理學）（社會學）の順序に排列し、各成分についての研究（抽象的具象的科學）と其者を取扱ふ者（總體に於ける研究（具象的科學））とを區別したるに在り。

四二　Ward: Dynamic Sociology. I. p. 2.

四三　Albert Piche: De la place de la sociologie dans l'ensemble des connaissances humaines. Paris. 1892.

四四　シュムメル、ギッディンスは其著き例なり、その他の小作家は論ずるに足らず。

四五　Lad: Introduction to Phil. Chap. I. 十餘種の意義を載す、曾て哲學雜誌第三號に總論永澤之氏の三十四種の列記あり、四の主なる思想家の哲學の定義を列記せるにして、哲學定義集題す、但し學問的分類を試みたるにはあらず。

如く、是等の名辭の意義を確定し明瞭にするは、適、其實地上の便宜なる性質を破壞するに過ぎざれども、今學問の性質を論し、社會學の性質を究むるに際しては、斯く汎く行はれたる學問上の名辭の意義の吟味を遺却するを容さず、卽ち此茫漠曖昧の內面に立入りて多少の吟味を成すの要ありとす。

哲學の名辭の多義なる、[四五]一一之を擧げむは煩にして益なし。今之を三類に大別して、其要點特質を奪ふに足るべし。現象研究の形而下學に對する、本體研究の形而上學の意義、其一なり。說明學に對する規範學の意義、其二なり。特殊原理の研究に對する、普遍原理の研究の意義、其三なり。是等の類別は、固より必ずしも此儘に諸家の哲學の定義と爲りて現るるに非ざるも、其解義及實質の根本たる要點を分析して擧ぐるときは右の如し。就中第一の意義を以てするは、歐西哲學思潮に普通にして、其知的探究の特質より生ずる必至の趨向なり、之を東洋に徵すれば、こは印度思潮の固有せる所にして、支那思潮の甚だ晩く有せむとするに至れる者、實理哲學の徒が、近時所謂第二期形而上學的思想として排斥する者、卽ち是なり。第二の意義は、支那思潮を始とし、各種の實踐的敎諦、就中諸般の宗敎を哲學と稱するに於いて存する所。第三の意義は、歐西學問の近世的發達に於いて生じ來り、知的探究の究竟、部分研究と全體研究との對比を爲し、其後者に名つけて哲學と謂ふに於いて出で來れる者なり。[四六]

四五　スペンサルの Specified Knowledge 及 Unified Knowledge を以て科學及哲學を解するは、其完全なる標本なり。

世の所謂科學は、更に思想家の濫雜なる使用を受けたるが爲に、頗る捕捉し難き者となれるも、今亦之を三類に大別するを得べし。第一は事物の論理的研究の成果、是なり。此意義に於ける科學は、學理の構成に於いて悉く論理の規定に隨ふを要する者、所謂論理上の虛僞より遠ざかるを以て其要事と爲す、是れ妄誕無稽なる迷信、及浮誇なる神學の構說等に反對するより起れる者にして、復興時代を承けてベエコンが新論理學を唱道し、以て新學問の基礎を置けるは、此意義なる科學の曙光と謂ふべき者なり。第二は事物の體系的研究の成果、是なり。此意義に於ける科學は、支離にして統一なき斷片的知識に反對し、其が事物本來の渾一的性質を遺忘し、往往矛盾と撞着とに陷り、各個各部の知識は稍增進の觀あるも、全體に於ける有效なる知識の小量に止まるを致すの弊を慨むより來れるなり。近世哲學的思潮の漲溢し來れるに應して、哲學者は宇宙を大觀し、而して其各部を究明せむとするや、每に此法に由る、コムト、ヘエゲル、スペンサルの如きは其標本なり、古代アリストテレエスの學問、亦頗る此傾向あり、始めて此種の研究法に科學的研究の目を下せるは、輓近ハルトマン[四七]の無意識哲學に在り。以上の二類は、共に學者の知識と世俗の知識との間に區別を立て、學者の知識を呼びて科學的知識といへるなり。科學の第三の意義は、卽ち分業的研究の成果にして、同しく學者の知識の中に就いて、人生宇宙の全體に關する研究を哲學と名つくるに對

四七　Eduard von Hartmann: Phil. des Unbewussten, Kap. I.

し、其部分研究に名つけて科學と謂ふ者、卽ち是なり。此種の見解は、第十九世紀一般の社會事象と同しく、其特質たる分業の長短二面を表する學問上の要項たり。

右各三類の哲學及科學の解義の中、哲學の第一及第二解義、科學の第一及第二意義は、毫も科學と哲學との根本的差別を表せず。就中形而下學及形而上學の區別は、今日の實理的見解よりすれば、一種の假稱に過ぎずして、特に這般の區別を以て截然たる二類の學問の成立ありとは、全く認むべきにあらず。抑、從來形而上的造詣と稱するものは、實は三類の誤認に過ぎず。不可知的を可知的と爲し、觀念の玩戲を以て造詣と誤認せる者、其一なり。[四八]抽象的形式的知識を以て特に客觀の實在ありと爲し、之を名つけて形而上界の實在と爲せる誤認、其二なり。[四九]絕對を以て相對以外若くは以上の實在と爲し、之に種種の相對的屬性を附加して、以て形而上界を構成せりとするの誤認、其三なり。[五〇]凡そ這般の誤認は、皆實理的研究の光明に遭うて殘存する能はざる者なりとす。哲學の第二意義、及科學の二意義が、毫も兩者の根本的差別を與ふるに足らざるは言ふまでもなし。規範的たる科學、說明的なる哲學說、世には極めて多きに非ずや。論理的研究、殊に體系的研究は、尤も哲學に於いて著明なる方法に非ずや。是故に哲學及科學の意義とし區別として今留存を許す可き者は、唯、其第三あるのみ、卽ち哲學は人生事物の全般に關する研究にして、科學は其部分研究なり、と謂ふ者あるのみ。

四八　大なるヘエゲル、或は少しく此弊に罹り、近時獨逸哲學の末流、多く此弊を現す。洵に惜むべきなり。而して乃ちニイチェの鐵槌哲學出づ。

四九　中世の唯名論に對する實在論は其適例なり。

五〇　印度哲學屢〻之を見、また歐西宗教の敎諦、神學の構說に通有なり。

一切の分業の利害と同しく、學問に於ける分業の必要及其缺點は、科學及哲學の對立を誘致す。分業の必要が科學を促すは言を要せず、科學の限界が哲學を促すについて、玆に少しく說述を要すべし。

科學は如何に發達するも、其科學として存せむ限り、到底踰ゆべからざる籬の存するあり、之を名づけて科學の限界と謂ふ。之を約して三項とす。第一に、一切の科學は事物の部分研究なるを以て、如何に一切の事物を網羅するに至るも、諸般の事物の間、卽ち科學相互の間及對象相互の間の關係を明にする能はず。第二に、一切の科學は實理的示命の部分研究なり、而も示命は渾一的人生宇宙の究竟的示命にして、而して此究竟性は部分性と相容れず、乃ち示命の完全なるは必ず全般研究の成果の認定を經たる後ならざるべからず、故に科學は到底學問に必要なる示命を供ふる者たるを得ず。第三に、科學は必ず或る假定の上に立つ、是等の假定を一般に原理といひ、原則といふ、[五一]卽ち是等の原理原則は各種科學の研究に入らず、而も若し是等にして眞ならず確ならざるか、其上に立てる科學は到底虛僞を免れじ。科學は斯の如く限界あるが故に、別に科學以外の學問、卽ち哲學ありて之を補足するに非ざれば、以て學問の性質を全うし難し。

然るに玆に疑問として出で來るは、這般の任務に當る哲學は、第一、果して其任に堪ふべしや、第二、果して科學以上に獨立すべしや、の二點是なり。第一、哲學は人生事物の

[五一] 法學の所謂原則、經濟學の所謂一大原理、倫理學の所謂人格、心理學の所謂觀念、宗教學の所謂神、物理學の所謂物質及エネルギイ、化學の所謂原子及親和力、星學の所謂星雲及六合引力、數學の所謂公理等、これ皆假定的原理原則の例なり。

全般の研究渾一的研究なれば、諸種の對象及科學の間の關係は、之に賴りて究明する事容易なるべく、全般研究に賴りて示命の究竟性を附與する事亦容易なるべく、又所謂假定的原理原則を吟味して知識及實在に達する事容易なるべし、故に第一の疑問は積極に於いて答へらる、哲學にして其性質を失はずば、科學の限界は之を補ふを得む。然も第二、哲學は果して科學とは無關係に其自存を遂げ得べしや、部分の知識を能規とせず、全般の知識は所規[五二]たらざるを得るや、渾一的研究の容易に談すべくして行ふに甚だ難きは、從來幾多哲學者の失敗之を證す。全般の知識果して部分の知識の所規なりとせば、先づ哲學を研究し盡して、然して後特殊なる科學に着手せむとするは、

五二　能規所規は、Bedingung 及 Bedingt といふ Condition 及 Conditioned といふと同義と知るべし。

百年黃河の淸を待つと一般、永劫其期なからむとす。固より全般の知識を以て部分の知識の所規なりといふも、科學の限界を基づくる事實より、此を以て彼の能規なりといふを害せず、所詮甲乙共に所規にして亦能規なり、卽ち學問研究の實際に於いては、科學及哲學に本末前後の別あるを容さずして、兩者の駢進乃ち學問全般の進歩を成す所以と知るべし。

既に科學的研究を經、其哲學に對する貢獻の受容せられたる以上の科學は、縱令哲學其者は未だ以て絶對に完全せりと爲す能はざるも、亦猶所謂科學の限界たる事項の研究をば暫く哲學の造詣に仰いで、自らは唯自個の科學的分野に滿足するを得べし。學問の體統に於ける較劣

位の學問は、頗る斯かる形勢に在るも、體統の冠位に在る社會學に至りては、未だ曾て斯かる形勢に立ち至らず、社會學に固有なる事項に關する、所謂哲學の提說は、其自身既に極めて疑ふべく難すべき者たり、是れ其特殊の知識が未だ所謂全般の知識の能規として大なる效果を成す程の貢獻を爲さゞればなり。凡そ斯かる形勢に於ける學問の取るべき方針は、唯、自個に於いて哲學的方法を取り、自個學問の限界を撤して、以て出來得る限り絕對的に近き學問的效果に達せむことを期するに在るのみ。卽ち此不幸なる形勢に於ける學問には、未だ哲學及科學の分別あるに至らず、宜く自身に於いて哲學的及科學的方法を並用する研究たるべき者なり。哲學及科學は、此際に於い

近時哲學其者の趨勢、亦之に向ふ。蓋し從來哲學と汎稱せらるゝ者の中、認識論に特に殊の科學と化了して殘れるまで、既に殘遺として殘存するなし、而して哲學の目は、此殘遺と幾許も異ならざる者、實は幾許も學者知識の一切の總束とに下せる名稱と化す。スペンサルの「第一原理」の册は、卽ち此殘遺（精くいへば其上篇 Unknowable のみ）にして、他の生物學、原理以下四篇を併せたる總束が氏の哲學なり。コムトのヘエゲルに、看來れば皆同じことなり。而して此所謂殘遺なる者、之を獨立せしむるも何等の價値なきは、本章第二節に論ずる如し。故に本文所謂實地に必要も、尤も合理的必要も、看來れば、理論的必要の成果、といふべし。

て判然たる學問の區分に非ずして、たゞ一の學問の內に於ける方法の區別たるに止まるなり。[五三]是れ斯學研究に於ける實地の必要なり。

且社會學に於ける哲學及科學の此見解は、亦合理的根據を有す、そは斯學が學問の體統の尖頂に位するが爲に、哲學といふも、究竟其至醇なる者は社會學の外に出づる能はざればなり。是は一見極めて僭妄なる論定の如きも、上來節を累ねて述べ來れる、社會、學問、及哲學の解義に顧れば、當然の推論のみ。唯哲學として論究するときは、初より學問體統の各節に輕重を置かず、特に社會學として論究するときは、學問に於ける分業を利して、他の名稱の學科の下に完全に論究せらるゝ事項は、暫く之を省略して

簡要に就くを得るを、異なりとするのみ。

哲學及科學に關しては、歐西に在りても大多數の學者は今尚曖昧模稜に安んず、是れ一は此名辭が明晰なる解明を害とするにもよれども、抑〻亦科學的考察と哲學的考察とが往往相伴はざるの缺點に坐せずんばあらず。スペンサル、ジェヂンス[五四]、コムト、ヘエゲル等、有數の學者に於いて僅に之を見るに過ざざるは、歐西の學界、今尚淺膚なる所謂學問上の常識の容易に迹を絕ち難きを見るに足らむか。

第四節　科學の體系

學問の體統は純論理的なり、此を現時の人文が有する學問界の實地に比照すれば、實に理想と見在との相違を見ずんばあらず。蓋し現時の科學界の造詣は、殆ど無意識的なる時代の産物、寧ろ遺物と謂ふべくして、結晶といはむよりも寧ろ無定形といふべきに近きは、已むを得ざる事といふべし。而も今玆に新に一學問を提供せむとするや、取捨の關係を脫する能はざるが故に、先づ宜しく在來諸科學に顧みて、其と此との地位を詳にするを要すべし。

科學の彙類を成さむとする、其標準は約して二綱とするを便とす、一は則ち科學の體よりする者にして、有形及無形是なり、二は則ち科學の用よりする者にして、理論及應用卽ち是なり。此二綱は範圍を相異にするを以て、此に由れる分類は自ら十字分類とならざるを得ず。斯くして科學の體系は左の如し。

五四　Jevons: Principles of Science.

五五　之を英譯すれば次の如し

第一篇　總論　第二章　社會學　九一

五五　第一理論的科學

f. Theoretical Sciences.
1) Material theoretical Sciences.
A) Physic- in its wide sense.
a) Physics.
b) Chemistry.
c) Dynamics.
B) Astronomy in its wide sense.
a) Astronomy.
b) Astrophysics and Geology.
c) Mineralogy.
C) Biology in its wide sense.
a) Physiology.
b) Biology.
D) A part of Sociology in its wide sense.
a) Geography.
b) Archneology.
2) Immaterial theoretical Sciences.
A) Logic in its wide sense.
a) Ontology.
b) Epistemology.
c) Mathematics.
d) Logic.
B) Psychology in its wide sense.
a) Psychology.
b) Aesthetics.
c) Ethics.
C) Principal part of Sociology in its wide sense.
a) History.
b) Sociology.
II. Applied Sciences.
A) Material Applied Sciences.
a) Technology.
b) Medicine
B) Immaterial applied Sciences.
a)Economics, Politics, Pedagogy.
b) Theology, Jurisprudence, International Law.

(一)有形理論科學

(甲)物理界の研究に任ずる科學(廣義物理學)

(伊)分子の外的關係を研究する科學(物理學)

(呂)分子の内的性質を研究する科學(化學)

(波)個物の相互關係を研究する科學(力學)

(乙)天體界の研究に任ずる科學(廣義天體學)

(伊)天體の相互關係を研究する科學(星學)

(呂)天體の歷程を研究する科學(天體物理、地質學)

(波)天體の構成素質を研究する科學(礦物學)

(丙)生物界の研究に任ずる科學(廣義生物學)

(伊)生活現象を研究する科學(生理學)

(呂)諸生體を研究する科學(生物學)

(丁)社會の研究に任ずる科學(廣義社會學の一部)

(伊)社會の外形を研究する科學(地理學)

(呂)社會の内狀を研究する科學(土俗學)

(二)無形理論科學

(甲)先天實在の研究に任ずる科學(廣義論理學)

(伊)先天實在の實在を研究する科學(實在論)

(呂)先天實在の知識を研究する科學(知識論)

(波)實在の形式的理法を研究する科學(數學)

(仁)知識の形式的理法を研究する科學(論理學)

(乙)意識の研究に任ずる科學(廣義心理學)

(伊)意識の體を研究する科學(心理學)

(呂)自由撰擇の體を研究する科學(美學)

(波)行爲を研究する科學(倫理學)
(丙)社會の研究に任ずる科學(廣義社會學の主部)
(伊)社會の實歷を研究する科學(史學)
(呂)社會の理法を研究する科學(社會學)

第二應用科學

(一)有形應用科學
(甲)人間生活の積極的必要に應ずる科學(産業工藝の學)
(乙)人間生活の消極的必要に應ずる科學(醫藥の學)
(二)無形應用科學
(甲)人生進歩の積極的必要に應ずる科學(經濟學、政治學、教育學)
(乙)人生進歩の消極的必要に應ずる科學(神學、法學、國際論)

以上は現時の人文が提供する所に就いて、成るべく條理ある科學の體系を形成せる者なり。此他茲に洩れたる諸般の學名尙多かれど、そは二類に約すべし。其一は右類別中の二項以上に兼ね亘る者にして、爲に其いづれに對しても部分的地位に在る者なり、例へば統計學の如きは、數學及論理學の理法を、社會學、經濟學等に應用せる者にして、何れに於けるも其方法論の一部を形成するが如し。其二は右類別中の各目の更に分業的に細分せる者なり、例へば物理學に於いて、物性學、音學、光學、熱學、電氣學の諸目あり、其電氣學に於いて、復電氣理論、電流論、感應電氣論、

摩擦電氣論、磁氣論、熱電氣論の諸小目あり、其磁氣論に於いて、更に復蔓線電流論、磁石論、電磁氣論、マグネヅケ論、地球磁氣論の諸細目ありて、各一科の科學を成し、各專門學者の專攻を須ちつゝあるが如きは、以て適例に供すべし。

右の科學體系に於ける社會學の地位を見るときは、三個の要點の注視すべきを發見すべし。第一に、社會學が理論科學の中に在りて、其有形無形兩部に存すること、是なり。第二に、社會學は亦學問體統中に在りしが、其孰れに在るも、毎に其最終の地位を占むる事、是なり。第三に、社會學が、其廣狹の二義ある事、是なり。就中第一項は社會學が特に獨立の一科を成すべき性質を表し、第二項は社會學が學問體統の冠位に在る所以の事理に應じ、而して第三項は、學問體統に於ける社會學と、其中核を形つくる社會學卽ち本著が講明を企つる社會學の本部との、差別及關係を表明する者なり。

學問の體統は、宇宙萬有の概括的觀取を能規として、容易に企つへからずとするも、科學の彙類は、科學者には以て自家の科學の地位を定めて他の諸の科學との關係地位を明にすべく、哲學者にも亦自家の知識と他一切の知識との相關を明にするの要事を成すへきこと、恰も佛家の敎相判釋の如きに拘らず、從來の科學者、殆と之を顧たる者鮮く、哲學者すら之に向うて一顧の勞を吝む者少しとせず、從來學界の一大缺典とせざる可けむや。唯コムトを奉する學者は、不完全ながらも多少之に着目す、就中ケエリイ[五六]の知識樹は、尤も注目に足る。諸家或は學問の體統と科學の體系とを混するの弊は、既に之を見たり。體系に注目するの功は、庶幾くは近時學問上に於ける分業の弊を減するを得むか。

五六　Corey: Social Science. vol. I.

第五節　社會學の解義

上來說述の結果として、茲に社會學の解義を擧ぐること左の如し。

廣義なる社會學は、社會の研究に任する學問なり。[五七]

社會學は社會の理法を研究する科學なり。

是故に社會學の觀念は、社會の觀念と學問の觀念との充全なる含蓄的結合なり。

されば又、社會の觀念に於ける三個の推論の各と、學問の觀念との結合によりて、社會學の觀念に於ける三個の推論を生ず。

五七　之を外譯すれば左の如し。

a) Sociology in the wide sense is *the* science which investigates the society.

b) Sociology is a science which investigates the laws of society.

La sociologie est la scince qui recherche les lois de la société.

五八　ラツツェンホオフェルは此第一推論を以て社會學の解義と爲し、少しく社會學の本解義を尽くるの觀あり、而も是れ少しく思の至らざる者なるべし。氏は類に Das Ich und die Menschen といへど、上來の說述によりて、社會といへば Ich und Menschen おのづから其中に在り、更に講明を進むるに於いて、就中 Ich の Menschen と主客の地位を取るへきは、明了すべし。故に第一推論が皆本解義の含蓄なる所以を一言することを新の如し。(Sociologische Erkenntniss. p. 5. 參看)

第一、社會學は人生と社會との相關の研究なり。[五八]

第二、社會學は尤も含蓄的意味に於ける人生の學問なり。

第三、社會學は最高の學問なり、究竟的學問なり。

社會學の研究は究竟的學問の研究なり、一切の要用なる科學的知識は之に向うて流注す、科學の造詣に向うて圓融なる實地的功果を賦與すると否とは、一に斯學の造詣に倚繫す。

社會學の研究は、社會といふ者あるが爲に之が學問なかるべからずといふが如き、輕卒にして漫然たる理由より起れる者に非す。物有れば則有りといふも、一事一物此世に存すればとて、直に之に向うて一科の學を樹てむとするが如きは、學問の品位を下して、優倡侏儒の事、好事者流の閑事に墮落せしむる者、而も是れ實に近來騷壇の一變象なり。之を社會學研究の意味に對する誤解の一と爲す。

社會學の研究は知識欲の充足の爲に起れる者に非す、知識欲の充

足の爲にする學問は、人格を侮蔑する者と謂ふべし、何となれば、人格とは智に非ず情に非ず亦意に非ず、智情意及其寄託なる身體を合せて、人の實在に下せる稱呼に外ならず、倫理上には這般の主體に下せる名稱に外ならずして、而も知識欲は則ち人格の劣位に在る智及意の劣位に在る者なればなり。是故に知識欲の作用は、或は人格の協贊を得可き者あり、亦然らざる者あり、知識欲を許して其專行に任すれば、是れ人格を無視する者なり。社會學の研究は、直に人格其者の要求より來れる者なり。知識欲の說は近來學界の一變象、而して社會研究の意味に對する誤解の二なり。

社會學の研究は、更に眞摯なる、更に大體に關する、更に根本的なる意味を有する者なり。社會學の研究は、直に學問本來の意味を繹ねて、人生其者の解釋に關して精進せむと擬する者なり。社會學の研究は、發達せる人格に向うて、自個を理解し、宇宙を理解し、乃ち究竟實在の了知體認に至らしめむと擬する者なり。

抑、個人の生存に關して、單に其自然的徑行に放任するは、野蠻未開の俗にして、之を名づけて敎なきの民と謂ふ、敎なきの民や眞に憫むべし、是に於いてか倫理の學あり、敎化の術あり、今社會の生存に關し、却りて其自然徑行に放任して顧みず、所謂常識の指導に一任し去りて復怪まざるは、誠に奇怪と謂はざる可けむや、天體の運行や、動植の成育や、本來人間行爲の分內に存せざるの事、而も駸駸たる學術の進歩は、既に漸く這般の境域に向うて人間行爲の新版圖を開拓す、社會や乃ち實に吾人人類の集合なり、吾人人類にして倫理敎化の學術及規定なき、野蠻蒙昧の境地に沈淪するを要すとせば則ち止む、苟くも然らずば、社會は如何なる理想に向うて進むべきかの規範的研究が起らざる可からざるは論を須たず、今社會學亦聊か斯意味を以て起れるもののみ。

此覩易き事理を沒却して、正當純粹なる社會學の興起を妨げたる者、凡そ二あり、一は個人主義の陋說にして、其個人を見るに太急なる、社會の見を爲す者を以て個人を害すと速斷す、二は放任主義の僻見にして、宇宙の事象は唯なる事あるのみ、する事は殊に之有りとす可

五九　是等の謬說は、後卷の講明によりて、其而立に堪へさるを表白すべし。

からず、社會の如き、亦其自然の徑行に放任するの外、曾て一毫の加減を容れずとする者なり。[五九]

從來社會學に關する諸家の觀念は、多岐複雜、之を、統整して明瞭に顯現せむは容易ならず。今大綱を二に分ち、第一を體貌の根本義たる社會の實在論的見地に由る分類とし、第二を攻究の動機たる斯學の性質目的に由る分類とし、以て其比較的精緻なる顯現を試むべし。卽ち左の如し。

第一、社會の實在論的見地に由る分類。

(甲)唯物論的社會學。　社會を唯物的實在と見做し、唯物的取扱を爲す、社會の生物的研究、有機體的研究、之に屬す。

(乙)唯心論的社會學。　社會を唯心的實在と見做し、唯心的取扱を爲す、社會の心理的研究、民族心理學、之に屬す。

(丙)二元論的社會學。　社會を物的及心的の二元的實在と見做し、二元的取扱を爲す、社會の有機的及心理的研究に由る社會學、之に屬す。

(丁)合一論的社會學。　社會を合一的實在と見做し、合一的取扱を爲す、社會の體統的研究、之に屬す。

第二、性質目的に由る分類。

(甲)記述的社會學。　社會現象の記述を以て社會學の性質と爲し、知識の尋求を以て目的と爲す。或は知識の尋求を以て究竟の目的とし、又或は之を已むを得ざるの目的とす。

(乙)實理的社會學。　社會の實理の探究を以て社會學の

性質と爲し、人生の進歩を以て目的と爲す。

凡そ是等の綱目は、必ずしも單純に斯の如くにして現存するに非ず、以上は固より抽象的に特質に就いて彙類せる者なり。而も亦往往頗る模型的なる斯學の見解の現存なきにあらず。

近時の諸家に就いて社會學の見解を見るに、唯物論的社會學は、スペンサル、リリエンフェルド曰はく、人間社會は一切の自然的有機體と同しく實在にして、宇宙の進程に於ける一段階に外ならず、唯一切の自然科學の基底に存立する同一の力の高等なる表彰たるに外ならず、今著者が討究せむと欲する者は、卽ち此人間社會其者なりと。[五〇]又いふ、科學は現象の總束の認識なり、卽ち知識なり、又逆に、一切の知識は科學として役立つものなり。[五一]人間社會は物質世界と同じく、固より亦現象と謂ふべくし

[五〇] Ged. ü. d. Socialw. d. Zuk. 1878. Bd. I. Vorwort.

[五一] 同上、Kap. II. Sciaulwissenschaft. s. 15.

[五二] 同上、s. 19.

[五三] A. Bordier: La vie de Société. 1887. 氏は巴里人類學校教授なり。

[五四] Sc. soc. cont.

[五五] Mouvement positiviste. 殊に Chap. II. Hierarchie des sciences positives.—Pluralisme et monisme scientifiques. を參看せよ。

[五六] P. Fabreguette: Société, Etats, Patrie. Etudes historiques, politiques, philosophiques, sociales et religieuses. 2. vols. Paris, 1898. I. p. 869

て、其科學たる社會學は乃ち成立すと。[五二]氏の社會病理學は一層此傾向を強うし、近著有機的方法論は又簡明に此旨を敍述す。ボルヂエが社會を以て生體と爲し、社會學を以て博物學の一分枝と爲せる、[五三]亦完全に此派を代表する者、唯其同僚ルトゥルノオの如く、分析敍述の頗る當を得たるは、以て多とするに足る。フイエエ曰はく、社會學の精神は動學的なれども、其體は往往有機體との比較に賴るを要し、其意識については社會意識と個人意識との比較研究を要すと。[五四]而して氏は社會に下すに、ド・グレエフと同じく、契約的有機體の目を以てせり。氏の近時の思想は、稍之を距りて合一論的に傾けるに似たり。[五五]近者ファブルゲットの如き、亦此派の所屬と見做すべし。曰ふ、社會學の名目や堂々たるも、實は畢竟歷史其者に外ならず。……斯學は倫理の學其者に非ず、斯學は自然科學の最終にして實驗的諸科學の端末に班す、社會學は、一切の學は其終局の造詣を成せりと假定して、自ら其建築の冠帽に居ると。[五六]漸く體統的見地を得來たるを察すべし。

唯心論的社會學はラッァアルス、スタインタアル、リンドネル等、社會

心理學者の其所屬たるべきは言を待たず、近時有數の學者にて、著く此色を帶ぶるは、ジムメル、ギッディングス、及スタインなりとす。ジムメル曰はく、社會、協力、及個人の協同生活の發達、幷に諸力及諸形式の研究は、特殊の科學としての社會學の唯一の對象たりと。[六七]氏の所謂社會化は、主として社會的群集の生成、及共同生活の形式の發達なり。ギッディングスの所謂社會化は、社交性即ち社會的心狀が、協同生活を營む衆個人の間に於ける發達是なり。氏は是を以て社會學を定義していふ、社會學は、根本的社會的科學としては、かゝる社交性の論究なりと。[六八]而して更に社會化を說いていふ、斯かる考察に於ける社會化は、又協同生活の效果たり、社會的群集の一效果たり、而して協同生活の發達せる形式の一原因たりとすと。スタインも亦、社會學、所謂社會哲學の主題を心理的問題に置けるも、氏のは主として社會觀の結局性に偏するの觀あり。[六九]タルド、ルボン、近くはアブラモフスキイ、[七〇]プリントン[七一]等の如き、皆此方面の研究に於いて新生面を開かむと力むる者なり。

二元論的社會學は、唯心論的及唯物論的社會學と、實際に於ける境

六七 The Problem of Sociology. Annals of the American Academy of Political and Social Science. Vol VI. No. 3. p. 67.

六八 Theory of Socialisation. p. 1—2.

六九 Soc. Fr. im L. d. Phil.

七〇 E. Abramowski: Les Bases psychologiques de la sociologie. 1899.

七一 D. G. Brinton: The Basis of social Relation. A Study in Ethnic Psychology. 1902.

域稍〻曖昧なり、二元論的といふも、多少此二者の甲若くは乙に接近せざるは少く、二者亦相互に多少の不純を含有すればなり。其所屬の主なる者は、シェッフレエ、[七二]ロ・フォン・スタイン、[七三]グムプロヰッツ、[七四]ラッツェンホオフェル、[七五]ノギコフ、[七六]等なり。シェッフレエは從來有機體的研究を重んぜしが、近時は頗る二元論的見地を取るに至り、其主著の改版[七七]に於いて、初版以來既に意識的要素を重んぜりとて、讀者の認許を求むるに熱心す。ラッツェンホオフェル及ノギコフは、尤も二元論的社會學の完全に幾き例にして、心理的要素と生物的要素とを兩兩對立して、以て社會の論究を成す。

二元論的見地の更に和熟せる者を合一論的社會學と爲す。こは體統的研究の充全なる發達形式と一致する者にして、吾が亦企つる所の者なり。その尤も完全なる表現はマッケンジイによりて見るべし。氏曰はく、凡そ社會の研究に任ずる學は三樣の區別あり、(一)アリストテレエスのエウドクサの集合を以て哲學とせるが如く、常識が與ふる所の社會に關する見地の集成を以て社會學に擬する者、是れ一なり、

七二 Bau und Leben des socialen Körpers 1896. 2 Bde. I. Allgemeine Sociologie. Vorwort.

七三 Sociologie und Politik. 1898. Grundriss der Sociologie. 1887.

七四 Combe de Lestrade: Eléments de Sociologie, 1880.

七五 同上の標題、1874. 4 Bde.

七六 Soc. Erk. 1898. Zweck und Wesen der Politik. 1898. 3 Bde.

七七 Novicow: Conscet vol. Soc. 1897.—Essai de Notation sociologique. 1895.

七八 Lorenz von Stein: System der Staatswissenschaft. Die Gesellschaftslehre. 1856.

(二)現時所謂社會學が表す如く、實驗科學の對象としての社會の研究、其二なり、(三)社會哲學の名義を用ゐるを要する所の、哲學的分析により、正確に講明せられたる原理よりして、社會的生活の理法を演繹する所の體系的研究を以て、其三とす、吾自らは第三を取らむと[七九]氏は又アリストテレエスが、凡そ説明には四法あり、第一は事物を何ぞやと尋ね、事物をばそを組成する各個元素に分析する事、第二は其をしてしかあらしむる者は何ぞと尋ね、其性質を決定する理法又原理を求むる事、第三は其生成の由來歷史を尋ぬる事、第四は其發達の理想及其生成の目的を尋ぬる事、是なり、といへるを擧げて、こは近世的事物研究の方法に非ざるも、亦以て説明といふことの梗概を擧ぐるに足ると爲し、第一問は博物的科學に應じ、第二問は精密科學に應じ、第三問は形而上學に應じ第四問は結局的學問に應じ、而して自家の所謂哲學は、此四邊を有する方形、又は更に此四圍を有する圓形に比すべしと爲せり。[八〇]氏の社會哲學は、明に規範の尋求を含む、乃ちいふ、上の第二及第四は科學としての社會學を成し、而して第一、殊に哲人の常識の敎示等は、一時社會哲學の代用たるを得べしと、蓋し哲學は理想の尋求なりとは、氏の綱領なり。合一的見地を裏面的消極的に表言せるはコオストなり、氏は其主著[八一]に於いて、先づ全然心理的研究に反對し、其序言に於いて揚言すらく、本著の目的は、近時張溢の勢ある社會學の心理的研究に反對するに在り、此勢は、斯學を以て道德及政治の學と混同するの虞あればなり、社會學は事實の學問なり、その觀念に於いて諸學科を支配すべきは勿論なるも、其自身は獨立ならざる可からず、其基礎は心理的主觀的なる可からずと、且氏は社會學を以て亦生物學より獨立ならざる可からずとして、いふ、有機體は各個差異を有す、差異ある衆有機體を相互に類比するはあらずと、[八二]唯氏の方法が此大主旨を實行するに副ふに足らざりしが爲に、其造詣に於いて大に見るに足る者ある能はざりしは惜むべし。

乃ち氏の斯かる見解は、表面に於いて、やがて記述的社會學及其一類と見做すべき統計的社會學となる、乃ち氏の社會學の義解にいふ、

七九　Mackenzie: Introduction to Social Philosophy, p. 11—18.

八〇　同上, p. 14—16.

八一　Adolphe Coste: Les principes d'une sociologie objective. Paris, 1899. p. 1.

八二　右同書, p. 48.

八三　Ch. Letourneau: La Sociologie. 1892. Préface.

八四　Le Play: La Réforme sociale en France. 4 vols. etc.

八五　Mayo-Smith: Statistics and Sociology. 1897.

八六　Soc. Sc. I. p. 9—40.

八七　同書, Chap. 2 p. 64.

八八　Courcelle-Seneuil: Etude sur la science sociale. 1862. p. 26—29.

八九　Lester F. Ward: Dynamic Sociology. 2 vols. 1883. Preface. VII

社會學は人間社會の現象を攻究して、其關係を決定し、現象相互を說明し、以て進化的根本現象に之を歸結する學問なりと。蓋し記述的と統計的とは、質を主とすると量を主とするとの差あるのみ、目的性質による分類の大綱よりすれば實に同科に置くべき者なり。記述的社會學の曉將にルトゥルノオあり、謂へらく、[八三]今日に於ける社會學と謂ふ所の者は、猶未だ諸の學科の聚合たるに過ぎず、社會の理法を求むとは今人の常套言なれども、未だ能く之に達せる者あらず、之を要するに、社會學は猶幼稚なり、先づ事實を蒐むるに非ずんば、理法の自然に出で來り、明瞭に識られむこと、豈期す可けむやと。スペンサルは亦頗る記述に偏す。之より一步を理法に向うて進めたるもの即ち統計的社會學にして、ルプレイ[八四]、マヨオスミス[八五]等、前後其曉將たり。

最後に實理的社會學は、コムトを以て鼻祖とし、ケエリイ、クウルセルスノイユ、ブンクブレンタノオ、等之を祖述し、近時ワアド尤も其實地的目的に贊し、フイエエ及ギクトル・コンシデラン亦前後漸く之に接近す。ケエリイ曰はく[八六]、理論的より實理的に進める諸般の知識は、社會學の根基なり、但し社會學は尚未た殆と成立せず、人間を形而上的に研究すること止みて、方法的に研究し、物理的理法と社會的理法との結合あるに於いて社會學は成る可き者なりと。乃ち社會學を定義していふ[八七]、社會學は、尤も高尚なる個性を確保し、尤も著大なる協同生活の力を堅持するの努力に於いて、人間を規定する所の理法の學問なりと。クウルセルスノイユはいふ[八八]、社會學は人間を全般に考察して、其意識的活動を研究す、社會の研究は抽象的存在としてに非ずして、社會組織の原子たる人其者の如く、情緒活動を有する自然的生物の如く研究するに在りと。米國に在りて更にワアドは大呼して曰ふ[八九]、世に死語あり又死學あり、學問の眞の目的[九〇]は人を益するに在り、人を益せざる學問は、興味ありとするも生命なき者なり、一切の學問の中、最も人世を益すべき社會學は、今や漸く好事家の玩具となり、乃ち死學の群に墮落せむとしつゝあり、此書は、聊か其鼻孔に向うて新なる生氣を吹き込まむと期する者なりと。乃ち近時更に頗る深徹の研究の成果として純粹社會學の著あり。此最後の實理的社會學は、即ち性質

九〇 Pure Sociology. 1903.

九一 Crafts: Practical Christian Sociology. 1895.

九二 Carl Bonhoff: Christenthum und sittlichsoziale Lebensfragen. 1900.

九三 J. Gaume: Geschichte der häuslichen Gesellschaft bei allen alten und neuen Völkern, oder Einfluts des Christenthums auf die Familie. 8 Bde 1868.

九四 Hélion: Sociologie absolue. 1875.

九五 Barth の左の如し。(L'année sociologique I.)
1) Sociologie classifiante: Littré. Roberty. De Gréef. Lacombe, Wagner.
2) Sociologie biologique: Spencer, Lilienfeld, Schäffle Fouillée, Worms.
3) Sociologie dualiste: Ward, Mackenzie, Haurion, Giddings.

九六 Novicow の二派分別は左の如し。(C. soc. evol. soc. p. 1)
1) Organique: les sociétés organismes.
2) Ethnographiques: la composition entre l'aggrégat biologique et social est une simple métaphore privée de toute réalité objective.

氏曰ふ、甲は五十年來榮えしも、今は少しく衰ふ、乙は之に乘して起りしも、格別の建設なくして[illegible]了りぬ、結局生物學と連結する者、近時科學の發達と斯學とを連結する者は有機體說なり、これなしには社會學は根なき植物なりと。

九七 Achille Loria: Die Sociologie, Ihre Aufgabe,

目的上本著が所屬たらむとする所の者なり

或る意味に於いて實理的社會學に對立して、獨斷的社會學といふべきものあり、就中その主要部分を占むるものを所謂基督教社會學とす、クラフツ、ポンホフ[九二]古くは、ガウメの類[九三]、比々皆これ、エリオン[九四]の如きは宗教を標榜せざる獨斷的社會學の標本とすべし、而も獨斷的方法は學として殆と價値なきこと本章第一節に述べたるが如きが故に、獨斷的社會學、基督教社會學などいふは、滑稽なる形容の矛盾といふべし。

社會學に關する種種の見解の彙類に關しては、上述マッケンジイの三分法あり[九五]、バルトの三分法あり[九六]、ノギコフの二派分別あり、ロリアの四分法あれども[九七]、皆不充分なるを以て、本文の提說をなせり。

諸家の中、各種の要素を等分に有して、所屬を定め難き者尠からず、ド・グレエフの如き、其著しき例なり。

Schulen und ihre neuesten Fortschritte. 1901.

(1)社會學派の四大別

(1)心理的基礎に立つ社會學

(2)生物學的基礎に立つ社會學 (Lamarck, Spencer, Darwin, Weissmann, Ammon, Kidd, Morselli, Novicoff, Gumplowicz, Vaccaro).

(3)經濟的基礎に立つ社會學 (Kautsky, Weissengrün, Adams, Rogers, De Greef, Asturo, Contento, Ferri, Groppuli, Labriola, Mallusi.)

(4)比較的社會學

一、言語學的

二、進化史的

三、殖民地的

第三章　問題及體系

第一節　對象及問題

一の學問の對象とは、其攻究が向ふ所の目的たる事物是なり。一の學問の問題とは、對象の內容又は外位、卽ち對象に附隨する事項について、其攻究に入り來る所の事項是なり。是故に一の學問は、其對象を以て大體其特質の限定を得るも、其問題の明に定まるを待ちて、始めて其特質は明確に限定せらるゝ者なり。[一]

斯かる事項卽ち問題は、大小巨細諸種の程度に於いて

一　例へば人類學も人體生理學も、同じく人體を對象とし、解剖學も衛生學も、亦同じく人體を對象とするも、其問題の異なるが爲に、各殊別の科學を成すが如し。

與へらるゝを得可きも、今要する所は、對象の觀念が與ふる所より一歩を進めて、斯學の内容によりて斯學の特質を限定表示するに過ぎざれば、要は唯其問題の大綱を擧ぐるに止まりて、詳密微細の點にまで及ぼすは全く不要なりとす。

社會學は社會を對象とす。此點に於いては、從來各派の社會學者皆相一致す。而して其成果彼が如く大に相異なる所以の者、對象の同一にも拘らず、問題の相異に因りて、方法の相異をも惹き、遂に全體の體貌全く相異なるを致せるなり。

問題の決定は必ず對象の決定の後に來り、而して其決定の規定は、卽ち學問の性質目的是なり。

對象と問題との觀念の明確を缺くが爲に、學問の原論の緊確を缺くは、學者の通弊たり。此點に於いては、佛國の學者は遙に獨逸の學者に讓らざるを得ず。近時獨逸學者の說述、或は形式主義に流るゝやの譏あるも、這般の精確は學問の創始及革新の爲に最要の件たり。尤もよき標本は、ワグネルの經濟原論第一部經濟原理[二]を推すべし。

[二] Adolf Wagner: Grundlegung der politischen Oekonomie: Grundlagen der Volkswirthschaft.

第二節　社會學の問題

社會學の問題は、之を論理的に提要し列敍すれば左の七項となる。

第一、學問本來の面目如何、卽ち其究竟の性質如何。學を講ずるの途に上るに際して、充全なる意識を以て眞摯なる事業を成さむとせば、先づ其本來の面目、究竟の性質

如何を確に定むるを要す。講學の最先最深なる根底は實に此に在り、學問上の立志は卽ち是なり。

第二、社會學の性質及根據如何。學問の性質既に明なる、乃ち進みて社會學其者の性質を吟味するを要す。且社會學既に眞摯なる意味を以て顯るゝも、其樹立にして究竟の根據を有せずば其造詣は以て眞摯なる意義に副ふ者とすべからず。社會學に對する、完全なる學問的意識、卽ち是なり。

以上の二問題は、是れ社會學の根本又先決問題といふべき者にして、前章に所謂哲學的研究の要ある所以なり、之を社會學問題の第一類と爲す。是に於いて社會學の基礎竝に建ち、而して其大綱細目の研究に進むを得べし。

第三、社會は如何に實在するか、卽ち社會實在の理法如何。社會の研究に上りて第一に起る問題は、其實在の研究是なり。社會の宇宙に由り宇宙に於ける實在の理法、卽ちその一般實在との外的關係の究竟原理、及社會の發生し存立し變遷する所以の理法、卽ちその自體の內的作用の究竟原理の攻究によりて、社會とは何ぞやの疑問は尤も完全に解明せらるゝ可からず。

第四、社會は如何にあるか、卽ち社會の現象如何。社會を其がある如く研究する事、學問上には尤も單純なる事項は、次に問題として來らざる可からず、社會の實地に於ける現象の論理的方法的究明敍述卽ち是にして、社會の具象的知識を精緻にする職能を成す者なり。

第五、社會は如何にあるべきか、卽ち社會の運命[三]如何。

社會の實在的及現象的研究に次いで來るべきは、其運命的研究なり。運命の問題は如何にあるべきかの問題なり、一は如何にあらむとするかの問題、二は如何にあらしむべきかの問題、此二個を以て如何にあるべきかの問題は組成せらる。[四]抑、此二重の意味を有するは、卽ち社會がやがて人生の學たるが爲なりとす。

右三問題は、卽ち社會の實在的、現象的、及運命的說明[五]にして、社會の研究に任する者が尤も主として懈る可からざる重要問題なり。此中には、極めて科學的なる研究を包含す、右の社會の現象的研究卽ち是なり。之を社會學問題の第二類と爲す。是に於いて社會の知識玆に全きを得、乃ち進みて實地の應用を圖るべき者なり。

第六、社會は實地如何なる經歷を有せしか、卽ち社會の歷程如何。實地の用を圖るに際し、先づ顧るべきは社會實地の過去是なり。蓋し實用は必ず既存の人間社會に對する經營に於いてし、而して既存の社會は必ず過去以來の歷程を有す、過去より以て現在に及ぼし、抽象理論より以て具象事實に及ぼす、乃ち以て完全を庶幾して相裨補するを得るに至らむ。本問題の重要なる所以なり。

第七、如何にして社會の實地に施行を試む可きか、卽ち社會研究の實用的理法如何。乃ち實地の用に臨むに際し、上來研究の總束の實用的講明を成すを要す。斯かる實用的講明の問題は、社會の成分の資格の取得、社會の運命

三　Teleologie といふ語に二樣の用法あり、一は結局の如字的意義にして、他は其學問的意義なり。吾が曾て哲學大觀に批評せる者は、此如字的意義の結局論なるが、結局論の純正なるもの、實は運命論なり。運命論たるのみて特に結局の意義なきものは、須らく譯語を別にするを要す、故に吾はこれを運命論といふ、卽ち成り行きの論究なり。

四　Werden 及 Sollen を以て運命の問題を組成す、といふ意味なり。

五　Ontological, phenomenological, and teleological explanation といふも妨なし。

に關する人爲の任務、及社會關係の規定、是なり。

右の二問題は、卽ち社會の實用に於ける問題を成し、尤も關係諸學科の科學的研究の貢獻を須ち、一切の知識の要を攬りて、再び社會學の基礎の上に總合的究竟的樹立を成し、以て學理と實際との過渡に在る理想の完成に到る者なり。之を社會學問題の第三類と爲す。而して社會學の研究は全く了る。

凡そ這般の問題につき、先づ第一類の問題を重んせざるは、小作者に於いて常に見る所、就中第一問題を等閑に附するは、頗る大なる作者も亦往往にして免れざる所たり、コムトが新なる述作は、特に之が爲に作れる者なり。蓋し大なる、根本的なる問題は、凡庸學者の學術的方法の力の及ばざる所、乃ち常識に一任して學問的勦襲を入るゝを爲さゞるなり。第二類の問題は、卽ち社會學の本部にして諸家固より之を等閑に附する者は、殆ど第四問題を以て斯學唯一の問題となし、歷史哲學に近づき若くは此より脫化せる社會學者は、第五問題を以て唯一に擬し、而して唯物論的若くは唯心論的社會學者は、純ら第三問題の攻究を以て能事了れりとす。斯學の分岐は尤も多く此點よりして惹起さる。第三類の問題を以て社會學とするは、俗流の今尙屢、免れざる所にして、爲に往往學者を困阨することの聞ゆるは、笑ふべきなり。就中第六問題を以て社會學の全部とするは、所謂文明史家、若くは文明史的社會學者、是なり、こは歷史哲學家、及歷史哲學的社會學者と同類なれど、乙は甲よりも本論に近づけるだけ優れたりとすべきか。第七問題につき駁雜なる詮議と、これが資料として第六問題の一部、近き過去に於ける社會の歷程の說述とを以て、學問の要を得たりとするは、淺薄なる所謂社會問題、社會主義者流に尤も屢、見る所なり。若し夫れ全然之を除却するを以て學問の要を得たりとするは、科學的研究の陳套を蹈襲する者にして、言ふに足らざれど、歐西の學者、殊に獨逸の哲學者流、

御用學者[六]には、往往此弊なきにあらず。

抑〻社會學と他の社會的科學との關係、歷史、文明史、歷史哲學、等との關係は、就中尤も學者の論議を惹ける者、グムプロヰッツ[七]の如きは此點に於いて頗る行き惱みの態に在り、是れ問題を明にせず、分析解明の充分ならざるに座す。社會學を、其內面的關係に於いて、卽ち其內容の體系に於いて、及其外面的關係に於いて、卽ち斯學と其他一切の知識との體系的外位に於いて順當明瞭に解義せむとする者は、先づ問題を明確にせざる可からず。此點に於いては、尤も發達せる佛國の社會學者、尙缺漏の譏を免れ難かるべし。

第三節　問題及體系

問題は、研究事項の大綱を擧げて、內容上學問の特質を明に定むる者、これが順序に循うて、直に攻究の歩を起すこと、可なるに似たるも、學問亦これ知識の渾一なる體にして、其形式は體系[八]ならざるべからず、卽ちこれを表示する學問の形式、亦體系的なるを以て最も完全とすべく、學問の目的より判して、亦最も便利なるべし、而して問題は體系を決定するに於いて、根本となり、規矩となる。

體系といふ語は、對象、問題といふ語の如く、其意義しかく簡單ならず、今少しく之を講明せむ。體系は完全なる知識の統整せる形式に下せる名稱なり。一切の知識は、其完全なるに於いて、卽ち順當、明瞭、及精緻[九]の三性質を具ふるに於いては、必ず大小諸般の程度に於いて體系的となる者なり。知識に大小の差あるが爲に、大小諸般の程度といふは免れ難きことなれども、其差等は唯程度の差に過ぎ

六　ショオペンハウエルはヘエゲル、つゞいてはシエリング、フィヒテを目して、Pseudophilosoph, Universitätphilosoph と冷罵す。今の獨逸大學亦往々此徒あり、之を呼びて御用學者といふ。

七　Sociologie und Politik, Buch I. 反覆論辯を重ねて尙要領を得る能はず。

八　System を系統といふことも世に聞ゆれど、體系といふを優れりとす。

九　Jevons: Elementary Lessons in Logic 簡明にこれが說を擧ぐ、所謂 Adequate clear, and distinct これなり。

ざるを以て、これを一括して、其形式を一樣に體系的といふを妨げず。但し通常謂ふ所の體系の語は、其知識の較、小なる者には用ゐずして、其較、大なる者に限れども、所謂大小は固より判然たる限界あるにあらず。知識の大小は、知識の對象卽ち外界實在の形式に應ず。今順序正しく之を列敍すれば、個念は個在卽ち個個實在の存在に應し、概念は個在の性質種類に應じ、斷定は個在究竟の關係に應じ、推度は個在整齊の理法に應ず。這般の方式もて知識を區分し行くときは、推度より以上、更に一步を進めたる大なる知識ありて、以て實在の總束に應ずる者なかるべからず、乃ち體系これなり。[10] 體系の順當なる觀念は、之によりて容易に得らるべきも、所謂實在の總束なる者亦隨時其分

10 Ueberweg: Logik.

野の大小を均くせざるべきを以て、概して體系を以て、必ずしも觀念乃至推度に至る知識の體統を繼紹し前進する者と爲さゞるを可とす。體系は、知識の一切に通じて、其完全の性質を表示する者と解せば、實地の用は足りぬべし。

學問の體系は、學問を構成する知識の統整せる形式にして、卽ち下せる名稱なり。或る學問の體系と稱する者、亦之に應ず。今これに要する資格を吟味すれば、左の如し。

一、其學問を方法的に分類し區劃せる者たるを要す。

二、其學問の各部の論理的相關を明示するを要す。

三、各部を過不及なく表示するを要す。

所謂方法的の分類區劃とは、一に十字分類を單一分類

と誤視せざること、二に分類の標準を明確にすること、三に重複及空隙を生ぜざること、の三要件を具備する分類區劃の謂なり。所謂論理的相關を明確にするとは、單に取扱の順序次第に關する形式、乃ち論理の範疇に於ける關係を正しうするを要するのみならず、又學問上の資料の內包に關する判別吟味をも正しうするの謂なり。所謂過不及なく表示するとは、全學問の分野をば、分類區劃の總束により、相等相同ならしむるを要するの謂なり。凡そ某學問の體系は、此資格を以て必要にして且充分なりとす。

以上は概して學問の體系を說けるも、通例較、廣大なる學問に非ざれば特に其學問の體系を說かず。[二]是れ幾分か其學問の進步の程度によるも、亦其性質に倚繫す。今社會學は亦此意味に於いて必ず體系的學問たるべき性質を具ふ。這般の性質は左の如し。

一、分野の廣大なる事。分野の廣大ならざる學問は知識の大を致し難し、乃ち特別の意義に於ける體系ある知識に到り難し。社會學の對象は社會にして、其問題は數多複雜なり。社會學は此二重の關係に於いて廣大なる分野を有す、乃ち宜く體系あるべし。

二、研究法の單一ならざる事。研究法の單一なる學問は、廣大なる分野を以てするも、大なる知識に到り難し。社會學の研究法は種種を並用するに於いて始めて完かる可き者、[二]乃ち宜く體系あるべし。

一一　例へば數學、經濟學、法學の如きは、全く體系を有する學問と目せらるゝも、礦物學、人類學の如きは、未だかく稱せられざるが如し。

一二　本篇第四章に詳說す。

三、渾一的研究なる事。支離滅裂の研究は零細なる知識を効果す。かゝる知識は、如何に其質と量とを多大にするも、以て體系的知識と爲すこと難し。社會學は渾一的研究を本旨とす、乃ち宜く體系あるべし。

社會學は體系を有する學問なりといふの理由及意義、斯の如し。今乃ち社會學の體系の講明に進むべし。

社會學に於いて體系的講明の思想は、亦是れ多くの現時の學者に缺乏す、是れ問題の思想の缺乏に伴ふ必至の勢なり。シェッフレエ、リリエンフェルド等、僅に模糊たる陰影を認むるのみ、現時佛國の諸家、亦此點に於いては特に言ふに足らず、獨逸に在りては、獨りラッツェンホオフェル、グムプロキッツの聊か此思想を懷けるあるも、未だ充分の方針を示すに至らず、何ぞ況や實行をや、現時斯學が門外の非難を聞く多くの原由は、主として問題及體系の思想の缺乏に坐せずんばあらず。

第四節　社會學の體系

社會學の問題に應じて、其體系は應に左の如くなるを要すべし。

一、社會學體系は、其問題三類の分別に隨うて、三大部門より成立するを要すべし。其第一門は、問題の第一類に應じて、社會學の基礎を置く者、之を社會學原論とす。

二、第一門亦其問題に隨うて二部に分る、卽ち第一問題の講明に任する者は學問總論となる。

三、學問總論は、第一に學問其者の性質を究明するの根本的研究たらざる可からず。學問とは何ぞやといふ疑問に究竟的解答を與ふるに非ざれば、充全なる自覺及之に

隨ふ所の充全なる摯實を以て學問研究の歩武を起すを得ず。故に學問原論を以て學問總論の第一綱とし、一に人生とは何ぞやといふ問題の第二解義、二に學問の人生に於ける地位、三に學問の分野及限界、四に學問の研究法、の諸問題に解答を與ふ。

四。學問の本質既に明に、其人生解釋の歩程に於ける必要の段階たること既に確なる以上は、進みて學問の全體を組織的に概觀せざる可からず。故に學問總論の第二綱は、學問體系ならざる可からず。

五。學問を其根本的意味より判斷して、云云の性質を有し、云云の内包を有し、云云の外延を有せざる可からずといふこと、既に明確となるも、過去に於ける人間の學問的經歷を回看して、其發達の事項を踪蹤するは、一に溫故知新の義に於いて利益ある事項たるべく、二に正當なる學問の組織の爲に資料を取るの便に於いて亦意味ある事を要すべし。故に學問總論の第三綱は、須く學問史論なるべし。學問史論は世界文明の發達に於ける學問發達の次第歷程を泛觀する者にして、其内包的意味に於いては、知的行動の眞正周到なる歷史といふべく、這般や直に行的行動の中核たり基礎たるが故に、其外延的意味に於いては、學問史論は直に世界文明史の眞髓を探る者なりとす。[一三]

六。以上三綱より成る學問總論は、以て社會學體系の前論を成す者、是に於いて始めて社會學の取扱其者に入る。

[一三] 所謂哲學史は、卽ち此重要なる職分を以て自ら居る者なり。抑〻眞正なる哲學史は道般學問史論の中核なれども、人間知的行動は、斷じて所謂哲學思想といふもの、分野にのみ局せざりしもの、故に本文謂ふが如き研究は、之を學問史論と譯すべくして、哲學史と譯すべきにあらず。Lecky: History of Rationalism. Lange: Geschichte des Materialismus などは、各此綱の一面を得たるもの。Draper: History of intellectual Development in Europe などは、體を具へて徹なりといふべし。近時我國の、儒學、支那諸子の教學、等を研究するもの、亦須らく研究所謂哲學の拘束定規を以てせざるむことに注意するを要す。

學問總論の三綱によれる成果を綜合すれば、社會學と稱する一體系の學問ありて、以て一切の科學を總括し、人生の根本的解釋を與へむと擬するの歸結に達すべし。這般の大體を攻究論述して、社會學の第二問題の解釋を全うする者は、體系第一門の第二部たる社會學總論を成す。

七、社會學總論は更に二部に分る、社會學の成立、意味、地位、體系、及研究法を取扱ふ者、卽ち社會學の全般的、隨うて根本的研究を論明して、以て學問總論と社會學各部の研究との連鎖を成す者、先づ來らざる可からず。故に社會學總論の第一綱は、社會學原理ならざるべからず。

八、社會學原理の論究既に成りて、社會學の存在玆に確立す、乃ち復斯學に關する觀念の過去に於ける消長顯晦の大勢を究明して、以て斯學構成の參考に資するを便とすべし。此講明は、特に一般學問發達史より離れて立するを便とす、是れ一にその特に斯學に關係するの親密なると、二に其が爲に一般學問の發達を綜蹤するに際して偏見に陷るの弊を避くべきとの爲なり。故に社會學總論の第二綱は、社會學史論ならざる可からず。

九、社會其者の研究は社會學本論を成す。社會學本論は、純然たる社會の科學的研究にして、正に社會學問題の第二類に應ずる者なり、之を社會學體系の第二門とす。

十、社會學本論は、其問題に隨うて、亦三部に分る。其第一部は卽ち社會の第三問題を解釋する者、社會の實在的研究にして、社會實在の理法、卽ち原理原則を剖析解明す、之

を社會理學と目す、亦社會實在論と稱すべし。

十一。社會の實在的研究は二綱に分る。第一綱は、實在の體統に隨うて排列せる宇宙一般の實在的研究にして、一般宇宙の實在の理法を尋繹す、之を內包より察すれば、これやがて社會の理法の根本的なる者を形成す、卽ち亦社會の理法たるに外ならざれど、唯特に社會にのみ存せざるを別とするのみ。之を一般理法論と題す。

十二。第二綱は更に萬有體統の最高なる、社會其者の實在の理法の尋繹にして、乃ち特に社會に存する社會理法の取扱たり。目して特殊理法論といふ。

十三。社會學本論の第二部は、第四問題を攻究する者なり、卽ち社會の現象の研究なり、之を社會靜學と稱す、又社會現象論と目すべし。

十四。社會は如何に在るかの問題、卽ち社會現象の研究は、必然二部に分る。其第一は、社會は如何にして成立するに至りしかの問題なり。社會は如何にして成立するかの問題にして、其第二は、社會は如何に成立するの研究は、卽ち社會發生論を成し、社會靜學の第一綱と爲る。

十五。これに次いで起る者は、卽ち右第二の研究なるが、直に社會の體及用を部分的に研究する者、乃ち亦この二方面によりて自ら二部に分る。社會の體を究明せんとする者は、社會の體制を究明する者、各種機關の構成、其相互の關係、及社會全體との關係作用を吟味せんとす、故に社

一四　Statics, Social Dynamics といふに對して、Social Logic といふべし、これ亦學問の體統の第一節を Logic と名づけたると同義にて、現象の事實的取扱に對し、這般の原理原則が先天の關係を有するに取るなり。

會體制論を以て社會靜學の第二綱とす。

十六。用の方面よりする社會の部分的研究は、右等各機關の運營作用の論明にして、社會運營論、乃ち社會靜學の第三綱を成す。

十七。社會學の第五問題を解釋する者を、社會動學、又の名社會運命論と目し、之を社會學本論の第三部となす。

十八。社會は如何に在るべきかの問題の中、如何にあらむとするかの問題をば、社會の研究に通常なる過現未三時の通觀により、上來究め得たる、就中社會理學の究明せる結果たる、理法の助を以て解明するは、社會動學の第一綱を成す、社會進化論即ち是なり。

十九。次に右の第五問題の後半、社會を如何にあらしむべきかの問題の究明は、即ち社會理想の詮議にして、社會理想論、以て社會動學の第二綱を成す。所謂文明の究竟的詮議は、此綱に於いて達せらるべき事項たり。

二十。社會學問題の第三類に答ふる斯學體系の第三門は、即ち社會實論にして、亦其問題に隨うて二部より組成せらる。

二十一。其第一部は、即ち社會學の第六問題に應ずる者にて、社會實地の現象を、そがありしまゝに、即ち其實歷のまゝに觀察する者なれば、呼びて社會實歷論といふべし。

二十二。社會實歷論は、實用に對する關係の親疎よりして、過去、及近き過去即ち現在、の二綱に別つを便とす。抑〻歷史が與ふる所の事象を觀察して、其得失を詳明するが爲

には、歴史に於ける這般の資料を秩序的に整齊するを要す、かくして此綱は、歴史其者とは趣を異にす、是れ社會實驗法を、大規模に社會研究に應用する者なり。

二十三。實地の應用には、尤も時處位に留意するを要す、是に於いて現在の社會狀態を研究するの要起る、之を名づけて社會現勢論といふ。社會現勢論は、一に廣義に於ける、卽ち各種の、社會問題を以て、社會の內的問題を攻究し、二に人種問題と謂ふ者を中心として、其外的問題の攻究を成すを要す。之を社會實歴論の第二綱とす。

二十四。社會學實論の第二部は、卽ち社會學の第七卽ち最終問題を解釋せむと要する者にして、之を名づけて經世論といふ。

二十五。社會學の實用的事項に隨うて、經世論は自ら三綱にわかる、如何にして個人は社會の成分たる資格を取得するかを解釋する教育原論は、卽ち其第一綱なり。

二十六。社會の運命に關する人爲の任務如何を解釋する政治原論は、卽ち其第二綱を成す。

二十七。最後に社會相互の關係に於ける規定如何を解釋する國際原論を以て、經世論の第三綱と爲し、而して社會學體系乃ち茲に全し。

今上來縷述せる所を一括して表示すること左の如し。

社會學體系[一五]

第一門　社會學原論

[一五] 之を獨譯すれば左の如し。System der Sociologie.

第一部　學問總論
第一綱　學問原理
第二綱　學問體系
第三綱　學問史論
第二部　社會學總論
第一綱　社會學原理
第二綱　社會學史論
第三綱　社會學本論
第一門　社會理學又社會實在論
第一部　社會理學又社會實在論
第一綱　一般理法論
第二綱　特殊理法論
第二部　社會靜學又社會現象論

I. Grundlegung der Sociologie.
A. Allgemeine Wissenschaftslehre.
1. Grundlage der Wissenschaftslehre.
2. System der Wissenschaft.
3. Entwickelungsgeschichte der Wissenschaft.
B. Allgemeine Sociologie.
1. Grundlage der Sociologie.
2. Geschichte der Sociologie.
II. Theoretische Sociologie.
A. Socialontologie od. Socialogik.
1. Allgemeine Gesetze.
2. Specielle Gesetze
B. Socialphänomenologie od. Socialstatik.
1. Socialgenesis.
2. Socialorganisation.
3. Socialfunktion.
C. Socialteleologie od. Socialdynamik.
1. Socialevolution.
2. Socialideal.
III. Practische Sociologie.
A. Socialhistorik.

第一綱　社會發生論
第二綱　社會體制論
第三綱　社會運營論
第三部　社會動學又社會運命論
第一綱　社會進化論
第二綱　社會理想論
第三門　社會學實論
第一部　社會實歷論
第一綱　社會歷程論
第二綱　社會現勢論
第二部　經世論
第一綱　教育原論

1. Socialprocess.
2. Socialzustand.
B. Sociallehre.
1. Grundlegung der Pädagogik.
2. Grundlegung der Politik.
3. Grundlegung der Internationallehre.

第二綱　政治原論
第三綱　國際原論

社會學の體系は、諸家甚だ意をこれに注がざること曾て述べたるが如し。コムトの社會靜學及社會動學をいへる、其包含に少差あれども、本文體系構成の一淵源たることは爭ふ可からず。社會理學の獨立も、本文體系構成の一淵源たることは爭ふ可からず。社會理學の獨立一部門を成せる、遠くは社會の渾一的研究に淵源し、較近社會の心理的研究の發達に促がされたる、必至の重要に因れるなり。近者スチュッケンベルグが社會學を三部門に分てる、粗雜なれども本文の考案を距ること遠からず。[一六]

社會實歷論が歷史と趣を異にする所以の事實は、社會實歷論に副ふ所の諸家の著述について見れば充分なり。ロジエエルの中世佛國社會史、[一七]ド・リイブルの革命前佛國の家族及社會[一八]の如きはその好標本に供すべし。後者はル・プレイの方法によれる過去社會の研究なり。

[一六] J. Stuckenberg: Introduction to the Study of Sociology. Division of Sociology. I) The Principles of Society. II) The Historical Evolution of the Principles. III) Sociological Ethics, or the Conditions of Social Progress.

[一七] Raoul Rosière: Histoire de la Société francaise au moyen age. 987—1483. 2 vols. 1884.

[一八] Charles de Ribre: Les familles et la société en France avant la Révolution. 2 vols. 1873.

第五節　普通社會學

社會學は斯の如く廣大なる體系を有すべき學問なり、斯かる體系を以てするに非ざれば、其本來の職能を全うするに堪へざるべければなり。凡そ廣大なる體系を有する學問は、其大體を把持すること、尤も講學上の要件たり。乃ち社會學の學習の爲にも、亦其豫修となり、大體の把持たるに足るべき講學を必要とすべし。斯學科を名づけて普通社會學といふ。

今斯かる目的にて社會を取扱ふは、體系に於けるが如き、充全なる方法的及論理的講明を爲す能はざるは論なきも、主として繁を去り簡に就きて、而も大體を失はざら

むを務むべし。今是を爲すに要する標準は、約して左の四項と爲す。

一、學問の最も著大なる特質に着目して、考究の對象の各部を彙類し、此彙類に隨うて章節を立つる事。

二、尤も重大にして親近なる事項に精密にして、較、輕小にして疎遠なる事項に疎略なるを妨げざる事。

三、敍述の秩序は、必ずしも方法的なるを期せずして、便宜に隨ひ、包含又は附錄の法に由るをも妨げざる事。

四、簡單なるも而も詳悉と明瞭とを期す可き事。

斯かる標準に隨うて普通社會學を編するに、先づ體系に於ける第三部は全く之を缺くを許すべし、是れ社會學實論は、社會學の大體を把持せる後に講究すべき者なればなり。次に第一部亦頗る簡略を許すべし、是れ社會學の大體の講明の爲には、一般學問に關する講明は、其正鵠を失はざる限り、唯觀念の順當と明瞭とを得れば足るが故に、就中學問の史論の如きは、全く之を缺くを妨げざれば成るべく大體に通じて簡明を期すべきなり。されば普通社會學[一九]は、左の四部より成立すべし。

第一部　序說
第二部　社會理學
第三部　社會靜學
第四部　社會動學

斯の如き普通社會學は、研究する者の爲には以て斯學

[一九] 之を佛譯すれば左の如し。
La sociologie générale.
1) Les prolégomènes.
2) La logique sociale.
3) La statique sociale.
4) La dynamique sociale.

の發端或は基礎を置くの事業と做すべく、學習する者に取りては亦其入門に充つべき者なり。

從來の學者は、往々體系的思想に乏しく、隨うて其著の地位たる、之を入門と見做すべしや、將た主著と見做すべしやを詳にし難き者尠からず。俗眼には些事なるべきも、學者の眼底には、體貌の大缺陷として映するなり。

第四章　研究法

第一節　方法汎論

學問の研究に於いて、其對象、其性質、其體系若くは綱領を詳にせる上は、更に其研究法を明にすること、研究其事に着手するに先だちて、至當の順序たり。學問の未だ進まざるや、常識の發展に在りて用ゐらるゝ所の方法を以て、直に一切の學問の方法と爲し、復批評判別を方法上に加ふることなく、既に學問全體に通有なる學理講明の方法を問はず、亦一の學問に特有なる研究の方法をも議せず、

直に其學問の研究に向うて進むを常とせるも、此の如きは完全なる成績を以て學問の目的を達する所以に非ざること、漸く確認を得、研究法は學理講明の前論中、必要なる一段を形成するに至れり。殊に社會學の如く、其研究の困難は學說の紛雜にも知らるゝ學問に在りて、研究法の重要は頗る夙く學者の認定を得たり。

研究法とは學理講明の方法なり。研究法は學理を了知せむとするの過程形式に名づくる者に外ならず。研究法は認識論又は論理學の特殊應用の一部たり。但し研究法は知識の實質について攻究することなく、唯知識を得る所以の方法、卽ち了知の方法について攻究するのみ。

研究法攻究の要項は、一に如何なる方法によらば其目的とする學理の了知に到るべきかを明にし、二に斯かる方法の効力の範圍及限界を明にするに在り。

社會學の研究法は、他の諸の學問と共通なる研究方法と、斯學に特有なる研究方法との二部より成立す。乙は更に其細節の分解說明を要す。故に本章は、以下序を逐うて這般の三事項を尋ぬる、三大段より成立すべし。

社會に對して研究法の論議なかりし間は、卽ち社會學の未だ存立せざりし時にして、社會學をば所謂哲學の汎稱より獨立せしめたりし一大動因は、研究法の意識卽ち是なりといふべし。コムト實理哲學の起りし事情に[一]察すれば、思半に過ぎむ。之に次いで尤も此事項の攻究に熱心なるはミル[二]なり。スペンサルは、其哲學體系の大規模なるに似ず、抽象的なる方法論は其極めて興趣を感ぜざりし所と見ゆ。佛國にありて、ルプレイ[三]は更に一種の方法を創始し、その斬新を以て一方

一 Comte: Discours sur l'esprit positif. 1898. 簡にして盡せり。

二 J. S. Mill: System of Logic: Part VI.

三 Le Play: La réforme sociale en France.

に雄視し、追隨者亦尠からず、[四]近時統計の流行と進歩とに連れて、益〻尠からざる勢力を得、マヨオスミス[五]によりて、新大陸にも強大なる聲援を見るに至れり。其他方法の論議は、諸家大抵これを遺れず。

社會學の研究法は、社會學及社會の觀念に連れて種種あり、社會學及社會の觀念に缺陷あるより、研究法に於ける缺陷を惹起するは、研究法を ば抽象なる論理的論議に止めずして、其實質をも包含する具象的論議を試むるの過なり。有機的方法[六]心理的方法など、奇態なる名辭は、實にこれが兆たり。[七]

第二節　一般方法論

學理の尋繹に於ける一般普通の方法は、論理學の看過を容さゞる所にして、一般に知識を得る所以の過程に於いて必ず率由する所の方法なり、唯或は意識的に、或は無

四　Vignes: La science sociale d'après les principes de Le Play. 2 vols. Paris. 1897. 尤も著しきもの。その第一方法論を參看すべし。

五　R. Mayo-Smith: Statistics and Sociology. 1896.

六　Lilienfeld の同名の著を見よ。

七　L. Stein: Wesen und Aufgabe der Sociologie: Eine Kritik der organischen Methode in der Sociologie. Berlin. 1898. を參看すべし。

意識的に、しかするの區別あるのみ。

一般方法を二綱に大別す、演繹法其一なり、歸納法其二なり。[八]

演繹法は、多少概括なる知識を分解して、多少特殊なる知識にいたる所以の方法なり。茲に謂ふ所の概括及特殊なる語は、比較的の者にして、較〻廣汎なる知識が包含する所の事項を、これよりも廣汎ならざる事項に應用して、得る所の知識は、卽ち演繹法に由る知識なり。

歸納法は、之に反して、多少特殊なる知識を總合して多少概括なる知識に造る所以の方法なり。茲に謂ふ所の特殊及概括といふ語亦前項に准して、較〻狹隘なる知識が包含する所の事項を、之よりも狹隘ならざる事項に合成し

八　Deductive Method 及 Inductive Method. など。

て、得る所の知識は、卽ち歸納法による知識なり。

演繹法は學理の應用に恰適す。故に一の學問の學理を明むるに當りては、更に優位に在る學問が與ふる所の學理より斯學が要する學理を求むる際に用ゐるべきものなり。歸納法は學理の發見に恰適す。故に一の學問の學理を明むるに當りては、更に劣位に在る學問が與ふる所の學理より斯學が要する學理を求むる際に用ゐるべきものなり。這般優位の學理の究竟は、不可疑の事實に外なること能はず、劣位の學理の究竟も、亦是れ不可疑の事實に外なること能はず、唯甲は概括の極に該當する事實にして、卽ち心的直覺に於いてのみ之を求むべく、乙は特殊の極に該當する事實にして、卽ち感覺的直覺[九]に於いて求むべし。兩者共に不可疑の事實たり又直覺たることは一樣なるを以て、演繹歸納兩法の基底は、卽ち直覺法其者に外ならざるを了知すべきなり。此心的と感覺的との直覺の二類によりて、所謂主觀的及客觀的二種研究法の分別は生ず。

[九] Mental Intuition 及 Sensational Intuition. を意味す。

學理の講明に於いて、兩法の效力及性質、正に斯の如し。斯くして造詣せる學理の應用に關しては、優位劣位全く之に反す。演繹法によりて一科の學問の學理を應用するは、之よりも劣位の學問に於いてし、歸納法を以て一科の學問の學理を應用するは、之よりも優位の學問に於いてす。甲の場合に於いては、應用は分解及應用其者にして、乙の場合に於いては、應用は合成に外なる能はず。而して這

般應用の究竟は、甲に於いては特殊の究竟にして、即ち感覺的直覺が與ふる事實を支配する理法に詣り、乙に於いては概括の究竟にして、即ち心的直覺が與ふる事實を支配する理法に詣る。

演繹歸納の二法は、單獨に其用を成すこと頗る困難を免れず、其並用に於いて效果は見はれ易し。蓋し兩者共に其起點より其終點に至る過程の頗る長距離なること其一因にして、單一の經由により生じ得る誤謬も重複の經由によりて除却せられ得るの蓋量[一〇]の甚だ大なることなし。其二因なり。此事は、講明の上にも、應用の上にも、相異なることなし。

一般方法論の大綱は斯の如し、之を社會學に施すも、亦固より例外たることなし。但し這般方法上の普遍原理は、此特殊なる學問に行はるゝに於いて、亦多少の變態を呈するを免れず、是に於いて研究法の論議の第二大段、特殊方法論に進むを要す。

ヲルムス曰ふ、一切の學問的方法の種類は五項を數ふ、觀察、實驗、類別、歸納、及演繹これなり、然れども這般の處措を實用する方式は、固より研究の對象に隨うて變ず[一一]と。此言は、一般方法論に於ける正鵠と誤謬とを表明するの標本として擧ぐるの價値あり、卽ち右の五項の中、前三項は必ずしも一切の學問に普通ならず、而も這般は往往かく誤認せらる、正鵠は本文所說の如く、方法の究竟を以て二種の直覺に在りとするに存す、乃ち上の一誤謬を除きて、氏の言は當れり。

一般方法の取扱は、カント[一二]、ミル、ジェヴンス[一三]皆之に功あり、就中後二氏は尤も大功あり、其他諸家、殊に論理書は多く[一四]親切に之を論せざるはなしとす。

一〇 Probability は數學上の方法としては蓋算と譯し、數量としては蓋量と譯す。

一一 La science et l'art en économie politique. Paris 1896. p. 79.

一二 Kant: Kritik der reinen Vernunft.

一三 J. S. Mill: System of Logic. Jevons: Principles of Science.

一四 Hamilton, Mansel, Ueberweg, Fowler, etc.

第三節　特殊方法論

社會學の研究に特殊なる方法は、自ら社會學の問題に該當せざる可からず。斯學の問題を以て判するに、其方法は、一般の科學に於けるが如く、事實の客觀的觀察に基つける知識の尋求、固より之を包含するも、而も亦通例哲學と謂ふ所の者に於いて見るが如く、主觀的考察よりして大體の事理を講明するの要あるを免れず。是故に社會學の研究法は、自ら二種の相反對なる研究方法を並用するの要あるなり、其一は合理的方法にして、其二は經驗的方法なり。

合理的方法及經驗的方法は、歐西近世哲學史の劈頭に於いて、兩兩相對して近世哲學思想の英華を爛發せる二大主義たりしこと、人の善く知れる所なり。二大主義各其長所を有して、哲學思想の開展に貢獻する所ありしも、其特長は卽ち兩者が後來學問研究の方法として駢立す可き所以の因緣にして、兩者一を以て他を排斥するは、不通の見のみ。卽ち合理的方法は、大體に關する究明に恰適して、一般方法に於ける演繹法の用に該當し、經驗的方法は、個個特殊に關する究明に恰適して、一般方法に於ける歸納法の用に該當す。甲は主觀的なり、乙は客觀的なり。甲は哲學的なり、乙は科學的なり。近世思潮に於ける這般二大主義の競爭及消長は、哲學的思辨と科學的趨嚮との消長を表する者に外ならず。

一五　本篇第三章第二節參看

一六　Rational Method 及 Empirical Method. を意味す。

社會學の發生は、社會の見解の哲學に埋沒せるを脫却せるに在りしが故に、右二大方法の中に就いて、從來殊に合理的方法の閑却せらるゝの弊ありき。

兩般の方法、共に特長ありて偏廢す可からざるの事理を沒却して、合理的方法より經驗的方法に移り行くを以て思想の上進、學問の進歩なるが如く思惟するは、近世思想の通弊たり。但し經驗的方法の論者は、概ね研究法の批評的研究を爲すの一雙眼を具ふるも、經驗的方法の重要を解し得ざる合理的方法の論者は、這批評眼を具へざるを例とし、研究法の吟味なしには造詣せる學理亦充分の正確を保し難きを辨知せず。此點に於いては、經驗主義の社會學者は合理主義の社會論者に比して優勝の地位を要求するの權利あり。

オオギュスト・コムトは此派の社會學者の尤も純粹なる者なり。其見解の大要、以爲へらく、人間思想の進歩は凡そ三段の階級を經由す。[一七]第一段は神學的考察の時期にして、其依據する所は專ら超自然的の存

原語に Theologique, métaphysique, positif といふ。

在に在り、此によりて一切の世界を說明せむとする者なれば、其構說の獨斷的空想的に流るゝは、幾と必然の結果たり。第二段は形而上學的考察の期にして、その依據する所は抽象の運用に在り、諸の抽象的力、換言すれば人化せる抽象を以て一切の宇宙萬有を說明せむとする者、其說の事實を離れて遠く觀念の玩戲に飛び去るは、亦是れ幾ど必然の事たるべし。第三段は卽ち實理的考察の期にして、其依據する所は全く推理と觀察とに在り、此二樣の機關、寧ろ此二樣の官能によりて、以て一切の宇宙萬有を說明し、以て其事實に到達せむと期する者なり。一切の思想、一切の學問は、究竟實理的考察に達するに於いて始めて完全を企圖すべしと。是れコムトが學問研究法[一八]觀の大主義なり。氏の研究法に所謂實理的方法は、主觀と客觀との兩面を具備して、唯其主觀に於いても、人間智性の充全なる運用たる推理に由らむと期し、斷斷乎として餘地一切の必的官能を排斥して、智性の前には其光を失ふ可しと爲せる者にして、世俗の或は想像するが如く、純然經驗的なる者には非ざるなり。コムトが强ひて實理的といふ新語を用

原語に Etre surnaturel といふ。

ゐて、敢て經驗的といへる套語を避けしは、亦是を以てのみ。但しコムト亦實に心理的內省法を否認して、其結果は虛妄に陷るを免れずとせり。[一九]要するにコムトの研究法の見解は、未だ到らざる所なしとせざれど、其大綱は頗る健全なる趨嚮を呈せる者なり。

而も之に次げる思想家、論客は、往往にして其眞相を了得するに堪へず、蕩蕩として實理的方法より經驗的方法に流駛し去るを致せり。乃ちケエリイは謂へらく、[二〇]凡そ科學の進歩する、抽象的より具象的に進み、大體の研究より成分の研究に進み、複雜より單純に進み、理論的より數理的に進み、設想より理法に進み、形而上學的より方法的に進むと。其論旨や、既にコムトの所謂實理的方法に於ける主觀的因子、卽ち推理を沒却して、單に其客觀的因子たる觀察の一面に偏し、之を基底として一系の歸納法を組成し、所謂經驗主義に偏向するを以て學問の進歩と見做すの弊に陷れり。フィスク亦其提唱せる宇宙哲學に於いて唱道すらく、[二一]凡そ學問研究の方法は、二類の分別を必要とす、一は主觀的方法にして、之に由れる成果は形而上的哲學なり、二は客觀的

[一九] Cours de phil. pos. I. p. 32, 80—84. 一般に方法を論ぜるを見よ。

[二〇] Carey: Principles of social Science. vol. I. chap. I. p. 9—37.

[二一] John Fiske: Outlines of Cosmic Philosophy. 1874. 2 vols. vol. I. p. 98.

[二二] 原語に Synthetic Method といふ。

[二三] 一八七七年氏の社會學原理刻成して世に出づるや米國社會學雜誌に於いてスモオルの批評にいふ、今やスペンサルの社會學は正に了れり、而も社會學の研究はこれより始まると、簡なるも擊てりといふべし。

方法にして、之に由れる成果は卽ち宇宙哲學なり、一切の科學は卽ち亦此方法の成果たるに外ならずと。フィスクは明に實理哲學の主要なる面目を沒却して、直に經驗哲學の橫流に向うて奔馳せる者、是に至りて學問の研究は遂に不健全なる畸形的方向を趁ふに至れるなり。

斯學の大家スペンサルは、其第一原理に於いて所謂不可知的を立し、科學は可知的についてのみ立する者なりとし、其方法は所謂綜合的ならざる可からすとせり。綜合的方法[二二]は歸納的方法の一なり、氏の所謂不可知的を研究せば、可知的との關係明瞭となりて、大に得る所あるべかりしを、夙く之を束擱せしは、氏の爲に惜むべし。氏は氏の目的を達し得たるも、社會學は氏以後の手を待つこと極めて多かりき。[二三]

近時漸く方法觀の健全に復する徵候は、デュルケイム、[二四]フイエエ、[二五]ハアリス、[二六]メンゲル、[二七]等に見るべく、殊にマッケンジイ[二八]に於いて著しとす、皆實理的方法の正鵠に向うて近づきつゝあり。マッケンジイは殊に獨創の見に富む、其造詣は希望を屬すべきものあらむ。

[二四] Les règles de la methode sociologique. 1895. 及 De la division du travail social の序論にも見ゆ。

[二五] Mouvement positiviste, 井に Mouvement idéaliste において見る、くし、氏の考は Science sociale contemporaine の始めて見れたる以降二十年間において大に變せるは曾て述べたるが如し、Schäffle 亦此類なり。

[二六] Harris: Method of Study of Social Science. Journal of the American Association of Social Science. 1879.

[二七] C. Menger: Methode der Socialwissenschaften. 1883.

[二八] Introduction to Social Philosophy.

第四節　合理的方法

合理的方法は、社會學研究の方法として、其哲學的研究の部局に主として該當する者なり。合理的方法は、コムトの實理的方法に於ける推理の方面に該當する者なるも、其所謂推理は、人間心的官能の中に就いて純ら智性の一部に偏局する者に似たり。智性の官能は、知識の尋求に於いて最も重要なるを疑はざれども、智性の範圍は單に推理的知識に限り、直覺的知識に至りては、必ずしも單に智性の官能に歸すべからず、直に人格其者の生産物と稱すべく、乃ち以て心理官能の三分法によれる智性唯一の産物と爲すは、少しく穩當を缺くの嫌あり。而して社會學に於ける哲學的研究が要求する合理的方法は、主として演繹法及歸納法に於ける究竟の起點歸點に係るが故に、直覺的知識に須つこと多く、隨うて直覺法に待つこと大にして、乃ち人格の渾一的官能に須つ者多しとすべき者なり。

合理的方法を其體より分析すれば、一に心的直覺及感覺的直覺の二目より組成する直覺的方法、二に論理學が提供する一切の推理的方法、此二大綱より成る者とす。合理的方法を其用より分析すれば、一に設想、二に理論、三に理想[三〇]の三大綱より成る者とす。就中設想は合理的方法の起點なり、理論は此より程を發して、論理的に正當なる方法に率ひ、思想を運用するの過程なり、而して理想は這般

[二九] Intuitive Method 及 Discursive Method を意味す。

[三〇] 之を外譯すれば Hypothesis, Theorisation, Idealisation. を以て充つべし。

の造詣をば更に分析綜合して、一種の複雜なる新觀念の構成に至るの過程なり。凡そ合理的方法は、客觀的徵驗及資料の蒐集の中、唯後者の一部を能くするのみ、合理的方法の單獨にては不完全なる所以にして、經驗的方法の要、玆に生ず。

合理的方法をして有理有効ならしむるの規定は、一に直覺的知識の知識論的規定、二に演繹的推度の論理的規定、是なり。[三一]此規定に協合する合理的方法は、實理的方法の一部を成す。

三一 Epistemological conditions of intuitive knowledge. 及 Logical conditions of deductive inference. を意味す。

第五節　經驗的方法

經驗的方法は、一般方法に於ける歸納に該當する者にして、感覺的直覺を與件として[三二]外界現象の客觀的觀察を營むより着手す。經驗的方法は、社會學研究の方法として科學的研究の部局に該當する者なり、コムトの實理的方法に於ける觀察の方面に該當する者なり、蓋しコムトの所謂觀察は廣義なり。

三二 感覺的直覺を經驗的方法中の產物と爲す者あるも、これが規定は應に合理的なるべくして、經驗的には毫も之あることなし、即ち感覺的直覺亦合理的に屬して、經驗的には與件たり、よく辨別を要す。

三三 Ontological conditions 及 Logical inductive conditions を意味す。

三四 前節の知識論的規定といひ、本節の實在論的規定といふ、較分野を廣く取れる論理學（廣義の論理學は勿論）は之を包含す、例へばミルの如し。カント、ヘエゲル等の論理學は即ち廣義なるものにして、これを根本的に取扱ふ。今合理的方法及經驗的方法を對照理解するに便せむが爲に、暫く狹義に隨ふ。之を約言すれば、合理的方法にありては演繹の規定、經驗的方法にありては歸納の規定に隨ふ。

經驗的方法の規定を概論すれば、外界實在に於ける事物相關の理法、卽ち時間、空間、及因果の理法、卽ち實在的規定を第一規定とし、歸納法の論理的規定を[三三]第二規定とす。[三四]

經驗的方法は、効果によりて之を二大別す、一を定性的方法と爲し、二を定量的方法と爲す。[三五]定性的方法は記述による方法にして、個個の事實につき列擧記述を成すときに効果する者なり。定量的方法は計算による方法にして、

一類の現象と他類の現象との間に於ける共在及繼起の關係を、事實に照して、其蓋量を數の關係にて表明する者なり。定性的方法を一名記述的方法と謂ひ、定量的方法を一名統計的方法と謂ふ。[三六] 一切の經驗的方法は、此二綱の中に屬せざるなし。

定性的方法の過程を分析すれば、一に事實の存在、二に存在の知識、三に知識の表言、四に表言の整理、是なり。這般四段の過程を以て、記述的方法の實行乃ち全く、而して社會現象の定性的研究玆に發す。這般四段の何れかに於ける誤謬は、此方法の誤謬の原因となる。所謂誤謬の可能は各段に應じて存す。第一、事實の存在は、實は與件にして、客觀的實在なるが故に、此に於いて適當に誤謬と否とを斷すべき者なきも、存在と不存在とは反對なる事實として成立し得べきを以て、這般混同の原因として、第一段亦誤謬の遠緣たる能はざるに非ず。第二、存在の知識は、卽ち客觀的實在及其方式に應ずる主觀的認識及了知の契合なるを以て、一般に外界事物の認識及知識の眞實なるが爲の規定に協合するを要し、這般の協合と不協合との際に於いて、誤謬の緣は乃ち生じ得べし。[三七] 第三、知識の表言は、全く學問上記述上の事項に屬す、社會現象の命名及記述は其複雜と多端との爲に、頗る混雜迷離を惹起し易く、而して誤謬の緣乃ち生じ得べし。第四、表言の整理は、更に體系の範疇に隨ふを要する者、體系は頗る高等なる論理的方法に屬すれば、此際に於いて亦誤謬の緣を生じ易し。[三八] 抑〻記

三六 Qualitative Method 及 Quantitative Method を意味す。

三五 といふも、妨なしとす。

三六 Descriptive Method 及 Statistical Method と外譯す。

三七 ラポック、スペンサル等、記述的社會學者が、時として妄誕なる旅行日記の類に據りて其記述を成せるより起れる誤謬は、卽ち其適例なり。

三八 ルトゥウルノオの社會學の視るべきは、此點の整美に在り。

述的方法は、單獨なる事象に關するを多しとするが故に、方法や單純、其誤謬亦見易き者多し。此方法は、多くの場合に於いて、定量的方法の輿件を供するに過ぎず、故に論理的規定を煩すこと甚だ大ならず。

定量的方法の過程を分析すれば左の如し、一に事實の重複的存在、二に重複的存在の知識、三に知識の分析、四に共在及繼起の計算、是なり。這般四段の過程を以て、定量的方法の實行乃ち全く、而して統計の原理亦玆に存す、誤謬の可能亦固より各段に應じ、率由すべき規定亦各段に見る可し。第一、定量的方法には必ず事實の重複的存在を要す、單獨存在には此法を施す能はざるや論なし、事實の重複的存在は、定量的方法の輿件にして、定性的方法之を供ふ。第二、重複的存在の知識は、外界現象を認識し又は了知するの過程にして、一般に認識及了知に關する規定は、皆此場合に有効なり。這般の外、亦特殊なる規定あり、重複的存在は衆多の事實の繼起及共在に係るが故に、事實の分離せるを强ひて共在若くは繼起と爲すの危險、其一なり、重複的存在の爲に、或は多少の類似を有して、而も異點の多き事實をば、强ひて同一事實の重複的存在と看做すの虞あること、其二なり。第三、知識の分析は、所謂同一事例として擧げられたる重複的存在に於いて、其異點を去り、其同點を抽象するの分析、其一なり、一體の複雜なる現象を分析して、某某事項の共在若くは繼起ありと斷する事、其二なり。斯の如くにして客觀の現象より研究上の資料を

得て、以て定量的研究の本部に進む、這般の本部は卽ち第四、共在及繼起の計算にして、所謂統計的方法は實は此本部を指す者に外ならず。

統計的方法は、衆個の現象に於ける一雙の事項の共在及繼起の定量的吟味なり。此共在及繼起の計算より、一定の結果、卽ち要求する所の理法の論斷に達するが爲には、全く數學に於ける蓋算の規定に隨はざる可からず。蓋量の計算は、近時應用數學の上に著大なる進歩なりしを疑ふ可からざるも、其効果亦自ら定限あり、蓋し定量的方法は、一般に、論理に所謂歸納法中、差違法及伴差法[二九]の原理を應用して、因果の間に於ける重複を、數量の關係にて表現せむとする者に他ならず、乃ち事物に於ける共在若くは繼起一雙の現象の間に於ける關係の、必然、偶然、若くは蓋然の程度を、數量的に表せむとして、外延的に重複の數を驗し、以て內包的に共在若くは繼起の蓋量を斷定する者なれば、畢竟假說に過ぎざるなり。定量的方法の、一見極めて確實なるが如くにして、必ずしも然らざる所以、實に玆に在り。今更に此法の效力の不充全なる所以を列擧せむに、吾人は必然的確度の、必要且充分なる標徴となすの充足事理を有せざる事、其一由なり。觀察の場合、卽ち重複的存在の數の、客觀世界に於ける同事例全體の數に比して、甚だ僅少なる事、其二由なり。[三〇]多くの場合に於いて、此方法は積極消極二個の範疇にて觀察の野を分ち、其消極について、性質上の分

[二九] Method of difference. Method of concomitant variation. 及 をいふ。

[三〇] 觀察に入り來れる件數をdとし、就中某理法（共在若くは繼起）を確むべき場合の數をtとせば此理法が與ふる蓋量は $\frac{t}{d}$ なり。然るにdと同樣の場合にして觀察に洩れたる件數はXなるべく、tに對しても亦同樣觀察に洩れたる場合の數xなるべし、卽ち事實此理法の蓋量は $\frac{t+x}{d+X}$ ならざるべからず、今 $x=\frac{t}{d}X$ とせば、

$$\frac{t}{d}=\frac{t+x}{d+X}$$

にして、吾人の遣せる理法は正確なるべきも、$x=\frac{t}{d}X$ とするの根據は全く吾人が有せざる所、而して $x=\frac{t}{d}X$ は X が d より大なるに隨うて蓋然なり、卽ち誤謬の蓋量は $\frac{X}{d}$ ならざるべか

類、即ち複因の探究を缺く事、其三由[四一]なり。斯の如く統計的方法は種種の弱點を有す、而して是等の弱點を脱却するは極めて困難なる事項なれば、此方法は、其効力の甚だ大なるが如く稱せらるゝにも拘らず、そは理想に於いての事にして、實地について切言すれば、社會學上餘り高く價値つけらるべき者に非ず。

經驗的方法を大體上より區分せる者斯の如し。以下進みて方法論の第三大段に移り、合理的及經驗的二大方法を組成する因子に就き、種類を悉して考察すべし。

經驗的方法を以て社會學に固有なる方法と爲し、社會學を以て單に此方法に由るべき學問と爲せるの尤も純粹なるは、マヨオスミスを以て代表者に擬すべし。氏謂へらく、[四二]社會學の研究法を大別して二

らず、故に本文の斷定あり。

四一　右の d−t＝n とせば、n は消極の場合なり、此 n を分析して、正に t の缺乏によるのみの場合なりや、若くは他に原因ありや、これを吟味せざる以上、斷定は甚だ危險なり。

四二　R. Mayo-Smith: Statistics and Sociology. 1895. p. 7.

樣となす、蓋し社會學は社會の體制及變動の事實を研究する學なればなり、二大方法の甲は定性的方法にして、即ち記述法なり、此方法は、觀察、分析、歸納、及概括の四程より成る、而も記述法は到底充分に明晰的確に事實に於ける理法に詣ること能はず、乃ち乙なる定量的方法一名統計法の必要を生ず。社會現象に於ける共在及繼起の關係の吟味は、此方法によりて大に鋭利を加ふべし、而も一切の社會現象皆悉く此法を施すべきにあらず、或は不適應なることあり、或は又不必要なることありと。氏が經驗的方法を別ちて定量的及定性的と爲し、殊に其定量的方法の應用に限界あるをいへるは甚だ佳なるも、社會學の方法を以て單に經驗的方法に限れるは、其可を見ず。

ヂュルケイム[四三]は、亦經驗的方法より出でたれど、極めて穩和なる傾向を呈す。其根本規則にいふ、社會的事實も、一切の事物と異なることなく、全く物として見、物として研究すべしと。而して其附則として、一に前定觀念を體系的に固持する事、二に概括的特徴を伴ふ概括的事實ならでは取扱はぬ事、を必要とせり。氏は觀念的理想的攻究の時期を

四三　Durkheim: Les règles de la méthode sociologique. 1895. —: De la méthode objective en sociologie. Revue de Synthèse historique. 1901.

以て、唯學問の初期にのみ固有なりとし、社會學は此期に止まること永かりきと歎せり。

統計學は、ケトレエ[四四]、エンゲル[四五]、リュメリン[四六]等によりて、今日の如き整然たる一科を成すに至れり、就中廣狹の二義ありて、廣義なるは、自然現象、たとへば氣象などにも通じて用ゐれども、狹義なるは、デモグラフィイ又はデモロジイの如く、國及民にのみ關す。但しデモグラフィイは併せて記述をも兼ぬるが故に、純粹の統計とは少異ありとすべし、現時中歐に在りてはマイル[四七]、マイツェン[四八]等尤も主要なる貢獻者なり。

第六節　事實の蒐集

方法の因子を大別して、客觀及主觀、若くは資料及運用と爲し、其客觀的にして資料に關するを事實の蒐集と爲し、其主觀的にして運用に關するを觀念の運用と爲す。

事實とは、客觀的事實に併せて主觀的事實を包含す、卽ち既に擧げたる如く、合理的事實と經驗的事實との兩般を包含す。蒐集とは、物質を空間時間の裏に一時一處に蒐集するの意味よりも、寧ろ思想の同一舞臺の上に觀念として蒐集し、直に思辨的工夫を加へ得ること、卽ち觀念運用の功程に進み得るの狀勢に至らしむること、是なり。事實の蒐集は、斯かる事項を意味するが故に、主觀的事實卽ち合理的方法に屬する者、及客觀的事實卽ち經驗的方法に屬する者、の兩類なかる可からず。今序を逐うて之を記述すべし。

第一、自我直覺。自我直覺は、自我が覺識の本體として、主體客體の相關相對の分別を爲すことなくして直に覺

四四 L. Quetelet: Sur l'homme, ou Essai de Physique sociale. 2 vols. 1835.
四五 E. Engel: Methode der Volkszählungen. 1861. etc.
四六 G. Rümelin: Reden und Aufsätze. 1875.
四七 G. Mayr: Die Gesetzmässigkeit im Gesellschaftsleben. 1877.
四八 A. Meitzen: Geschichte und Technik der Statistik. 1886.